

能謡同名異曲考(二) : 付、大和田建樹旧蔵 番外謡本について

西野, 春雄

(出版者 / Publisher)

The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University /
野上記念法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Nogaku kenkyu : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究 :
能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

14

(開始ページ / Start Page)

101

(終了ページ / End Page)

172

(発行年 / Year)

1989-03-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020403>

能謡同名異曲考(二)

―付、大和田建樹旧蔵番外謡本について―

西野春雄

(承前)

本稿は、『法政大学文学部紀要』第三十一号(昭和六十一年三月発行)に発表した「同名異曲考(一)」に続くものである。前稿の冒頭で述べたごとく、歌曲「アヴェ・マリア」に、シューベルト、グノー、アルカデルトのそれぞれの作品があるように、謡曲にも曲名が同じでも全く別の作品(同名異曲)が少なくない。逆に、名前は違うが内容が同じという作品(異名同曲)もかなりある。たとえば、前稿で触れた「和泉式部」を例にとると、甲乙丙丁の四種がある。まず「和泉式部(甲)」は、「稲荷」または「稲荷山」ともい、和泉式部が山城稲荷山に詣でた折り、式部を見染めて焦がれ死にした賤の男の亡霊が、式部の息女小式部に憑き祟るのを回向して成仏せしめるという作品。次に「和泉式部(乙)」は、「書写詣」または「書写」と別称し、小式部に先立たれたことを悲しみ書写山に詣でた和泉式部が、罪障懺悔に來し方を語り舞を舞う。三つめの「和泉式部(丙)」は「法華竹」の別名で「歌薬師(乙)」ともい、病を治すために肥前の国法華竹の薬師に参詣した和泉式部が、歌を詠み祈るも祈願の甲斐もなく、都へ帰る舟出の折り、波

風頻りに立ち騒ぎ神霊が出現、式部の歌の返歌をなし、病を平癒せしむという内容。四つめの「和泉式部(丁)」は、「貴船」の別称で、貴船神社に詣でた和泉式部が和歌の徳によって、相別れて久しい藤原保昌と再会するという能である。「和泉式部」というものの、四番ともそれぞれ別曲なのである。

さらにまた「和泉猩々」を例にとると、甲乙の二種があり、「和泉猩々(甲)」は「孫次猩々」「七人猩々(乙)」とも別称するが「和泉猩々(泉猩々)」が通名らしい。一方、「和泉猩々(乙)」は別名を「寄合猩々」「七人猩々(甲)」ともいい、現行演目「大瓶猩々」とは同工異曲で、「和泉猩々(乙)」を縮約したのが現行の「大瓶猩々」であると推測される。そしていま見たように「七人猩々」にも、「寄合猩々」と別称する「七人猩々(甲)」と、「孫次猩々」や「和泉猩々(泉猩々)」と呼ばれる「七人猩々(乙)」がある。かくのごとく甚だ錯綜し入り組んでいるのである。したがって、こうした複雑な諸相を正確に把握し弁別しておかないと、いたずらに混乱してしまう。

そのうえ同名異曲群のなかには、例示した「和泉式部」のようにそれぞれ別々の曲というケースもある一方で、先述の「和泉猩々」のように、主題や脚色は似ているが作詞や作曲形式がやや異なる同工異曲・同材異曲とか、構想・構成が類似する同工類曲といった作品もかなりあって、そこに能謡の改作・改修の問題、あるいは翻案・影響関係を見ることもできるのである。

この稿は、こうした視点に立って、これまで調査して来た観阿弥時代の古作能から近代・現代能に及ぶ古今の能謡約二五〇〇番のうちから、約三〇〇種六〇〇番の同名異曲群について整理したものである。なお、前稿ではただ「同名異曲考」としたが、この題名だけではどのジャンルについての考察か分かりにくいので、今回から「能謡同名異曲考」と改題したことをお断りしたい。

凡例的な事項は前稿に同じで、五十音順に曲名をあげ、それぞれに甲乙等を付し、簡潔に説明することを心がけた。

また成立年代の確定または推定できる作品には、古作能(観阿弥及び観阿弥時代までの能)・中作能(世阿弥から観世長俊時代の能)・近作能(安土桃山時代から江戸時代までの能)・近代能(幕末から明治・大正・昭和前期までの能)・現代能(昭和後期から現代までの能)などの形で、その旨を記し、また作者や成立事情・影響関係などにも触れることにしたい。ほとんどが田中允氏の『番外謡曲』(正統)、『未刊謡曲集』(一)三十一。統一)の調査・研究に拠るところが多く、その学恩に感謝申し上げるとともに、多少の新見もあることを申し添え、ご示教・ご批判を賜りたい。なお、紙幅の都合もあるので、全体に簡明を旨とするが、主として廃絶演目について多く述べ、現行演目に関しては簡略に従う。参考までに、前稿で取り上げた作品は次の四十八種九十九番である。

- | | | | | |
|--------------|--------------|------------|---------------|-------------|
| 1 明石(甲乙) | 2 明石上(甲乙) | 3 赤間ヶ関(甲乙) | 4 阿古屋松(甲乙) | 5 朝比奈(甲乙) |
| 6 足引(甲乙) | 7 足引山(甲乙) | 8 飛鳥川(甲乙) | 9 飛鳥寺(甲乙) | 10 化野(甲乙) |
| 11 雨乞(甲乙) | 12 天橋立(甲乙) | 13 綾鼓(甲乙丙) | 14 鮎(甲乙) | 15 有王(甲乙) |
| 16 硫黄島(甲乙) | 17 池上(甲乙) | 18 石の鏡(甲乙) | 19 和泉式部(甲乙丙丁) | 20 和泉狸々(甲乙) |
| 21 和泉小次郎(甲乙) | 22 和泉三郎(甲乙) | 23 磯崎(甲乙丙) | 24 板敷山(甲乙丙) | 25 市原小町(甲乙) |
| 26 一来法師(甲乙) | 27 田舎道薬寺(甲乙) | 28 稻荷(甲乙) | 29 犬寺(甲乙) | 30 伊予湯(甲乙) |
| 31 鶯(甲乙) | 32 歌薬師(甲乙) | 33 姥が火(甲乙) | 34 浦上(甲乙) | 35 浦島(甲乙) |
| 36 雲林院(甲乙) | 37 笈搜(甲乙) | 38 扇巴(甲乙) | 39 鶯宿梅(甲乙丙) | 40 大磯(甲乙) |
| 41 大社(甲乙) | 42 岡崎(甲乙) | 43 鴛鴦(甲乙) | 44 落葉(甲乙) | 45 追掛鈴木(甲乙) |
| 46 かぐや姫(甲乙丙) | 47 笠寺(甲乙) | 48 鹿島(甲乙) | | |

【霞ヶ関】 49

甲―霞関。『未刊謡曲集』続二所収。甲乙丙とも同工類曲の關係にあり、同文のところもある。山の手に住む僧(ワキ)が桜田の花盛りを眺めようと霞が関に来たところ、都の空を恋い、桜に心寄せる浅木の好方の靈(シテ)と、好方と契りを交わした女の靈(ツレ)に会う。その夜、読誦し跡を弔うと、妄執の晴れた好方の靈が現われ、報謝の舞を舞う。浅木の好方の恋物語を二場型の夢幻能にしているが、脚色稚拙で人物がよく描かれていない。武蔵野の名物紫草の縁で紫草を持たせ『源氏物語』の若紫につなげているものの、何が妄執なのかもわからない。名寄の類では『吉田名寄』(吉田本番外曲外題集に付載、近世中期以後の福王系写本)・江崎本『遠キ諷組』(姫路江崎家蔵、近世中期以後の写本)・『享保六年觀世大夫書上』所載謡名寄(日本庶民文化資料集成『能』所収、昭和五十三年刊)・『謡千番外題』(田中允氏蔵、近世中期の写本)・『大和田名寄』(大和田建樹著『謡と能』所載、明治三十三年刊)・『松尾名寄』(松尾楽山編「謡曲総まくり(二)」)。明治四十四年九月十五日発行『日本及び日本人』所載)などに「霞関」「霞ヶ関」「霞が関」とあるが、甲乙丙のどれかを指すかは分からない。しかし、いずれも近作能であろう。

乙―霞が関。『未刊謡曲集』十六所収。甲と同じく浅木の好方の恋物語に取材し、文章も甲とほとんど同じだが、ワキは東国の僧で、武蔵の国霞が関見物の旅とすることと、主人公を甲のようにシテとツレとせず、シテ好方だけを登場させることが主な違い。前場が短く、全体に簡略で稚拙な短編。これも近作能であろう。觀世本「霞が関」の内題下に「桜田ノ影カ」とある注記が暗示するように、次項「桜田」に基づいて作ったものらしく、同工異曲の關係にある。

丙―桜田。『未刊謡曲集』十六所収「桜田」の別名で、「桜田」が本来の曲名らしい。甲乙と同じく浅木の好方と里の

女の恋を描くが、甲乙よりはよくできている。シテは女の霊、好方はツレ。諸国行脚の僧が武州多摩の郡に住まいし、花の盛りの桜田を訪ねたところ、野に住む女に会い、霞が関の謂れなどを聞く。やがて草の陰より男の姿が現われ、二人は回向を願って消える。僧が観音懺法を誦読していると、歌舞の菩薩となった女の霊と、恋路の闇の迷妄の去った浅木の好方の霊が現われて、昔を語り、報恩に連れ舞いをする。現行曲「女郎花」にやや似た能で、三番のなかでは比較的まとまっている。昔を語る恋物語(クリ・サシ・クセ)の詞章は三番ともほぼ同文。名寄類には「桜田」は見えないようだ。

【合浦】 50

甲—合浦・合浦の玉。元禄二年刊三百番外百番本(いわゆる四百番本。国民文庫『謡曲全集』下巻に翻刻)ほか版本・写本で伝わる。唐土合浦の浦に住む男(ワキ)が、見馴れぬ魚を釣った漁夫(アイ)からその魚を買ひ、海に離れた。その夜、鮫人という魚の精(シテ)が男の家を訪れ、命を助けてくれた報恩に宝珠を捧げようと告げて消えた。男が合浦の浦に行くと鮫人が現われ、寿命長遠・息災延命の宝である合浦の玉を贈る。『看聞日記』に、永享四年二月仙洞御所で「かつほの玉」の上演記録が見える。また『春日若宮御祭礼図』の能の曲名中にも見え、田楽でも演じていた古能。観世流現行曲の「合浦」は版本系を少し縮めた形。

乙—合浦。『未刊謡曲集』二十一所収。甲の前場を削除した半能形式の短縮形で、現存する能本のなかで最も短い作品。ワキの名を「きけい(亀慶・儀慶)」とする。なお甲の翻案と思われる作品に廃絶曲「白魚(喜慶)」がある。甲と同工で、釣に出た漁夫たちが、全身、真白い魚を釣り、殺そうとするのを、喜慶が憐み、家財に代えて命を助ける。その夜、魚の精が報恩のため喜慶の宿を訪ね、宝珠を贈るといふ趣向。『謡曲叢書』一に「喜慶」として所収。

【鎌田】 51

甲―鎌田。『新謡曲百番』所収。下掛り系写本に伝存。僧になって故郷の尾張野間の内海に帰った源義朝の家臣千丈の前に、鎌田兵衛正清夫婦の霊が現われ、昔を語り、回向を喜ぶ。『能本作者注文』作者不明の項に見える「鎌田」が、甲か乙かは不明であるが、天和二年刊『謡名集』（『宝生』昭和五十八年四月号に西野が翻刻・紹介）以下諸名寄の国付はみな山城となっていて、次項の乙に一致するので、『能本作者注文』の鎌田は乙をさすかもしれない。

乙―鎌田。菊若または菊若丸と別称したか。『未刊謡曲集』四所収。上掛り系の写本に伝わる。鎌田兵衛正清の遺児菊若丸を預かる鞍馬寺東光院の住僧を訪ねて、都に潜む菊若丸の母が対面のため乳母を伴って登山し、その成長を喜び酒宴となったが、菊若が隠れていることを知った景清が配下の者を連れて召し捕りに来る。女装させて逃げようという母に対し、僧は法師になして紛れさせようと、急ぎ菊若丸の髪をおろしたが、景清は幼い新発意を怪しき捕らえ、輿に乗せて下山する。母と子の情愛を描き、追手を欺くためとはいいながら剃髪し、息詰まる探索と捕縛、そして別れ、と観客を一喜一憂させる展開。『言継卿記』天文三年四月九日の条に、近江途中郷の還来大明神の祭礼での日吉・梅若立合能に「菊若」上演の事が見え（「菊水」の誤写説もあるが、原本注記は「シッケン」で「実盛」にかかる）、本曲の別名である可能性が高い。『遠キ諷組』に「菊若」、『吉田名寄』に「菊若丸」が見える。

【亀破坂】 52

甲―亀破坂。『未刊謡曲集』九所収。仙台本第一種にのみ写伝し、名寄にも見えない珍曲。シテは弁慶。義経主従が作り山伏となって逃避行を続け、義経の北の方も童形に変装させて同行、越後の亀わり坂に着いたが、山中で北の方が倒れ、息も絶えそうになった。弁慶は義経の命令で水を求めて山へ入ったが日照りのため水もなく、一心に八

幡に祈るや、岩間に水が見え、結んで帰ろうとするも踏み迷う。ようやく戻ったが、すでに北の方は絶命。弁慶は北の方の口に水を注ぐと、不思議にも息を吹き返し、また男子を無事に出産、義経一行は陸奥へと下る。田中允氏は荒唐無稽な筋とされるが、『義経記』巻第七「亀割山にて御産の事」に見え、これに取材した作品であろう。名寄類にも見えないので近作能と思われる。

乙―亀わり坂。『未刊謡曲集』二十六所収。伊達本にのみ写伝し、名寄にも見えない近世調の短編。加賀の白山に参る東山雲居寺の僧が加賀の亀わり坂で、遊女の霊に会い、「むかしの遊君の、かめわり坂のうばがあとを」弔う。短いながらも二場構成だが、好事家の手になるらしい無内容な能。

【唐 糸】 53

甲―唐糸。『未刊謡曲集』十九所収。『吉田名寄』『遠キ諷組』に見えるのみ。源頼朝(ワキ)は獅子の間の御殿に俄かに生い出た小松につき安倍の仲持に占わせると、めでたい瑞現で、鶴が岡八幡宮の御前で今様を囃せば神徳も豊かになると告げたので、今様の上手満寿の前(シテ)に舞わせた。鎌倉の四季を歌い奏でる舞の見事に感心し、頼朝は満寿の国里と親の名を尋ねる。満寿の母唐糸は木曾義仲へ内通したため石籠に幽閉の身。母を救うため満寿は索性を明かし、引き出物に母の命と己が命の引き替えを哀願する。頼朝はその孝心に感じ、唐糸の罪を許し、信濃の手塚の里を与え、母子は里へ帰る。『お伽草子』の「唐糸草子」に取材した作品で、鎌倉の四季を歌うクセ以下の詞章にその影響が見られる。短編ながらよくまとまっております、近世初期の作かもしれない。

乙―からいと。『未刊謡曲集』二十六所収。『遠キ諷組』のうち仮名書きの「からいと」は本曲をさすらしい。鎌倉を訪れた都方の僧の前に、歌舞の名手からいと幽霊が現われ、回向を願う、という単純な筋の近世調の短編。

【蛙】 54

甲―住吉蛙という。『謡曲叢書』一所収。貞享三年刊二百番外百番本(いわゆる三百番本。国民文庫『謡曲全集』下巻に翻刻)をはじめ伝本多い。住吉へ詣でた紀良貞が女に逢い、別れたのち再び訪ねると、女は不在で、蛙のはい回る跡が文字になっていて、「住吉の浜のみるめも忘れねばかりにも人にとはれぬるかな」という和歌(小異あり)であったという、毘沙門堂本『古今集註』ほかの中世古今注及び『曾我物語』に見える蛙の女の歌説話に基づいた作品。住吉の蛙の精が社参に來た都の歌人に歌物語をするという能で、謡物としても伝わるクセがその物語。『自家伝抄』に金春禅竹作とある。中作能。『いろは作者注文』『東勝寺鼠物語』所載能名寄(『室町ごころ―中世文学資料集―』に影印と佐竹昭広氏の解題がある)・天和二年刊『謡曲集』(『宝生』昭和五十八年四月号に西野が翻刻・紹介)以下の諸名寄に所見。本曲については徳江元正氏「番外曲「蛙」考」(『室町藝能史論攷』所収)が詳しい。

乙―根元蛙(根本蛙)といい、これが通名。『未刊謡曲集』十所収。「蛙」という字の起こりと「かわず」と読む起源説話に取材した中国種の作品。少しややこしいが、梗概は、唐嵇郢(ケイイフ)の傍らに住むヤウレイ(ワキ)が夢の告げに従い混明池へ急ぐ途次、夢と変わらぬ童子(前ジテ)に会い夢の有り様を語ると、童子は喜び正体を明かして消える。混明池に來ると水は涸れ、桂木に夢と同じ虫があまたいる。その虫を文字に作るべく、虫を扁に桂を旁にしたが、桂木が枯れているので圭ばかりを旁とした。その読みを思案していると、最前の虫(後ジテ)が本体を現じ、文字の作製を喜び、天帝に祈雨するや、その声を聞いた小蛇(ツレ)が現われ食おうとしたが、俄かに大雨降り、水が出て蛙は難を逃れ「今こそ此川、いでたるに依て、我名を川出と、号すべし」告げて池水に入った。「根元蛙」なる題名から見て「蛙」(甲)よりは後の作か。名寄では、『吉田名寄』『松尾名寄』に所見あるのみ。室町末期か近世初期の作品か。

丙一蛙。『未刊謡曲集』二十六所収。伊達本にのみ写伝。甲の説話に拠るものの単純な作で、上京辺に住む男が住吉の浜を訪れ、浦の女(住吉の浜で歌を詠んだ蛙の精)に会い宿を借り、その夜、住吉の神が姿を現わすという趣向。名寄にも見えない近世調の短編。好事家の作であろう。

【川中島】 55

甲一川中嶋。『未刊謡曲集』二十六所収。これも伊達本にのみ写伝し、名寄にも見えない近世調の短編。都一心院の僧が信濃の善光寺に参詣の祈り、川中島で如来堂に住む男(本多善光の霊)に会い、如来堂に案内され、善光寺の来歴を聞き、その夜、本体を現じた善光の舞を見るところの内容。構成上の不備が目立ち、いずれ好事家の試作か。

乙一川中島。『未刊謡曲集』続二所収。竹中実が作詞・作曲し昭和三十八年九月に京都市伏見区西大手町大光寺で上演した現代能。修羅物。作者の竹中実(一九〇二〜一九七五)については、前稿の「明石(甲)」で簡単に紹介したが、京都薬学専門学校を卒業した薬剤師で、戦前は製薬会社・病院等に勤務の傍ら、観世流の手塚亮太郎に師事し、戦後は伏見区讚岐町の自宅で薬局を経営。昭和十六年から戦後の昭和三十八年ごろまでに三十番近い新作能(含、謡物)を書いた能楽愛好家である。全作品につき謡本があり(謄写版または木版刷)、観世流大成版謡本にならった前付もあって整っており、ほとんどが素謡などで行われた。本曲の梗概は、概説に「都方の僧、信濃の善光寺に一人の由ありげなる老人に会ひ、善光寺の所謂れ、川中島の旧蹟などを尋ぬるうち突然夕立に襲はれ老人の姿は見えずなりにけり。その夜僧の夢に甲冑を帯する謙信の姿現はれ、川中島大合戦の有様を委しく模して見せ、跡弔ひ給へと頼みつつ消えてゆく」とある。

私は前西芳雄氏のご教示で、京都在住のご子息竹中宏氏からその全作品を綴じた『竹中実作品集』を貸与され複写

させていただき、経歴などもうかがい、『古今謡曲解題』補訂版(昭和五十九年二月)付載の「明治以後新作謡曲」の項に作品名と発表年次を載せ、いずれ別稿でその詳細を紹介し考察する予定でいたが、資料をお見せした田中允氏が『未刊謡曲集』統一(昭和六十二年九月)の「明石」の解題で、略歴と作品のリストを紹介され、順次翻刻されている。竹中実の新作能は脚色・趣向・文章ともに見るべきものがあり、戯れに作った近世の作品とは数段の違いがある。その傾向は『源氏物語』に取材した「雲井雁」「若紫」「明石」「桐壺」、『平家物語』に拠った「重衝」「清盛」、宗教者・神社仏閣の縁起等を脚色した「親鸞」「法隆寺」「本願寺」「知恩院」「北野」「祇園」「銀閣寺」「御香宮」、神話・伝説・歴史・事件に取材した「八咫鳥」「クレオパトラ」「蒙古襲来」「水漬屍」「原爆」「爾靈山」「河童」「飛龍」「椎葉」「人魚」「白虎隊」に大別され(以上、おおむね発表順)、上杉謙信と武田信玄の川中島での戦いを脚色したこの「川中島」は歴史物に入る。

【祇園】 56

甲―祇園。武塔天神と別称する。元禄十一年刊四百番外之外之百番本(いわゆる五百番本。『謡曲末百番』に翻刻)所収。『謡曲叢書』一所収。春、日本を守る武塔天神素戔鳴尊(シテ)は「病災を免れる符を呪し来たらん」と天竺の北にある九相国に渡るべく南海に赴くと、貧しい蘇民将来(ワキ)が泊めてもてなした厚情に感じ名を明かし、水無月十五日に茅の輪の神事を行うことを教え、雲に乗って消えた。六月、蘇民は茅の輪を越える神事を行い「齡を延ぶる祭事」に感謝していると、悪疫をなす飛乱破の鬼神(ツレ)が現われ、害をなそうとするが、武塔天神(後シテ)が光を放って頭れ、鬼神の難を払い、眷族を引き具し山城祇園社の神体(牛頭天王)となった。室町末期の作か。祇園が通名らしく、田安本のみが武塔天神。名寄では『松尾名寄』に武塔天神とある。

乙―祇園沙汰(祇園貞)ともいい、『能本作者注文』に「祇園沙汰」を作者不明とする。中作能。『謡名集』の未勘国に「祇園さだ」とあり、諸名寄に所見。こちらが通名らしい。『未刊謡曲集』四所収。『平家物語』巻六「祇園女御」に取材し平忠盛の沈着かつ思慮に富んだ行動を描く。祇園へ御幸の折り、夕暮れ近い頃、みさきに頭が針のごとく光り眼が星のように輝く変化の者が見えた。供奉の人々(立衆)驚き騒ぎ、大臣(ワキ)は忠盛(シテ)に退治するよう命じた。変化のしわざと思えるので領掌しがたしと答えたが、重ねての宣旨に忠盛は進み出で、生け捕りにした。火を灯し見れば社頭の火灯しの翁で、折節、五月雨降りそそぎ、濡れぬように小麦の殻を頭にいただき、土器にみあかしを灯し、手に瓶を持つ姿が変化の者に見えたのだった。天皇も思慮深い忠盛の行動に感じ、寵愛の祇園女御を与え、事なく還御し、忠盛は祇園の沙汰の佳名をとどめた。現行曲「鶴」ほどの深みはないが、忠盛の人物像を生き生きと描き、小品ながらもしく出来ている。

丙―祇園。『未刊謡曲集』続三所収。竹中実が作詞・作曲し昭和二十八年三月一日に発表・発行した現代能。曲柄を五番目または略脇能とする。同書の概説に「播州広峰の神主都祇園に参詣したる折、一人の翁出で来り、祇園の社の御事や、祇園会の事ども余り委細しく語りけるにより、御身は如何なる人かと尋ねしに翁は素盞鳴尊なりと明して立ち去りぬ。その深更先の翁は素盞鳴尊の姿となりて現れ、その昔檜の川の川上にて八岐の大蛇を退治し名剣を得たる有様を残らず示現して祇園の社に入らせ給ひけり。」とある。京都生まれの作者らしい着想で、とくにワキ神官・ワキツレ従者(二人)が前シテ(尉)から祇園会の来歴を聞く場面(サシ・クセ)では、クセが鉾尽くしとなっている。作者はここを「鉾の段」となづけ、独吟・仕舞にもとしているが、たしかにクセだけを独立させてもいい。後場は鬼退治を見せ、ツレ八岐の大蛇も出るが、謡はない。季節を三月としている。

【鬼界ケ島】 57

甲—硫黄島とも別称する(柳洞本ほか)が、硫黄島にも同名異曲があり、こちらを硫黄島(甲)としよう。『未刊謡曲集』四所収。現行曲「俊寛」の後日談で、俊寛の家の有王(ワキ)が、俊寛の娘の文を携えて、配所鬼界ケ島を訪ね、老い衰えた俊寛に会う。文を読み慟哭する俊寛は、娘への返書をしたため(サシ・クセ)、有王に託し、硫黄の煙りを目前の地獄と見、栄枯盛衰を感じつつ草庵に帰る。乙とは同工異曲。鬼界ケ島には甲乙丙の三種あるので元禄十年刊『能之凶式』所収の名寄以下の諸名寄に見える鬼界ケ島がどれをさすかは不明。また「俊寛」も硫黄島ともいうこともあり、貞享四年刊『能之訓蒙凶彙』以下の諸名寄に見える硫黄島がどれをさすかも分からない。硫黄島については前稿参看。

乙—文僧都の別称。有王(甲)ともいう。『未刊謡曲集』七所収。建礼門院御産の御祈りのため非常の大赦が行われ、国々の流人が帰されたが、俊寛一人鬼界ケ島に残された。俊寛の娘は嘆き悲しみ、家人の有王に文を持たせ、鬼界ケ島に渡らせた。衰えた主君と対面した有王は文を渡し、俊寛を草庵へ連れて行く(中入)。後場は、俊寛の死を悼み、骨を拾って首に掛け、都へ帰ろうとする有王の前に俊寛の霊が現われ、名残を惜しむ。甲は、乙の前場だけを独立させたような形。混乱を防ぐ上からも本曲は文僧都を通名としたい。前稿の「有王(甲)」参看。

丙—俊寛(俊寛僧都)。現行曲「俊寛」の喜多流での呼称。鬼界島。

【菊慈童(菊士童)】 58

甲—慈童(甲)。彭祖・彭祖仙人(甲)とも。いわゆる三百番本に菊士童の名で所収。国民文庫『謡曲全集』下巻所収。巍の文帝の聖徳・治世をことほぎ、仙人彭祖が仙薬を献上のため参内した。仙人はもと周の穆王に仕え寵愛された

土童で、ある日、帝王の枕を越えた科により、てっけん山に流されたが、帝王から普門品の二句の偈を授けられ、菊の下葉に書き付け誦して日を送り、菊に置く露の滴りが不老不死の薬となって七百歳の齢を保ち彭祖と名を変えたのだと告げ、菊水を捧げることを約束し、てっけん山へ帰った。文帝は南陽県でっけん山に行幸、彭祖は仙家の菊水を捧げて御遊をもてなし、文帝の齢を延ばした。金剛流の「彭祖」はこれを少し縮約した形。中作能。

乙―枕慈童(甲)。れっけん山・てっけん山とも。観世流では「菊慈童」といい、宝生・金春・金剛・喜多流では「枕慈童」と呼ぶ。枕慈童として『謡曲評釈』五・『謡曲叢書』三に、菊慈童として『謡曲大観』二一・『解注・謡曲全集』四に所収。菊慈童(甲)の前場を省略し後場だけを独立させたかたち。ただし行幸でなく、巍の文帝の臣下が勅使として、てっけん山に分けのぼり、薬の水の水上を尋ね求め、山中に仙家を見だし、永遠の美少年の慈童に会い、菊水の謂れを聞く。慈童は遊舞をなし、帝に長寿を捧げるといふ趣向。喜多流にのみ慈救(四句)の偈の由来を説くクセが舞の前に入る。また金剛流の小書「前後之習」では省略された前場が付く。なお観世の「枕慈童」は別曲で、こちらをかりに枕慈童(乙)とする。中作能。

『能本作者注文』作者不明の項に見える「慈童」、天和二年刊『謡名集』以下の諸名寄所見の「じどう仙人」「はうそ仙人」「きくじどう」が、甲乙いずれを指すか不明。類曲に「菊水慈童」がある。「菊水」の項参照。

【菊 水】 59

甲―菊水慈童。『謡曲叢書』一所収。下村本「菊水」に「此クセ菊土童ト同ジ。少シ異也。菊水土童トモ云」とある。菊慈童(甲)と同工異曲。これも前場がやや長く、後場は極端に短い。魏の文帝の時、てっけん山の彭祖仙人が都に出て菊水の印を結んで参内し、帝王にめでたい菊水の仙薬を捧げ、自分は周の穆王の時の慈童で今七百歳に及び彭

祖と名を改め、不老不死の身を保っている謂れを語り(クセ)、靈山に道しるべする。帝王はてっけん山に御幸し、彭祖は仙家に入り仙薬を調じ、やがて不老不死の薬を与えんと慈童が現われ、奇瑞を見せ、山路の仙家に入った。彭祖が菊水の印を結ぶということが主な違い。前場の冒頭ワキの次第は「日月遅し不老門、出で入る日こそ久しき」。クセは菊慈童(甲)とほぼ同文で、舞跡の詞章「もとより薬の酒なれば」以下は現行観世流の「菊慈童」と同文。

乙―菊土童。観世流現行曲「菊慈童」。58菊慈童(乙)のことで一場物。魏の文帝の勅使が酈縣山に分け入り、七百歳に及ぶもなお童形を保つ美少年に会い、少年は枕の妙文(二句の偈)のことを語り、帝に七百歳の齢を授け、菊水を汲みつつ遊楽をなす。冒頭のワキ次第は「山より山の奥までも、道あるや時世なるらん」。観世流が演目に加えたのは明治以後。慈童物については竹本幹夫氏「作品研究『菊慈童』」(『観世』昭和六十年九月号)が詳しい。

丙―菊水。『春日若宮御祭礼図繪』所載の田楽能の菊水。大和田建樹著『謡曲評釈』第一輯(総説)・高野辰之著『日本歌謡史』・『日本庶民文化資料集成・田楽・猿楽』等に所収。全体的には、58菊慈童(甲)の、いわゆる三百番本「菊土童」に同じ。二場型だが、一場型の半能として行われることもあったらしい。ここでは二場型として述べる。魏の文帝の臣下が勅を奉じて仙人に参内を促すためてっけん山に行く。「千世までと、咲き添ふ菊のまさり草、久き君の恵かな」と仙人が登場、周の穆王に仕えた慈童で七百歳を保ち今は彭祖と名乗る仙人で、仙薬を捧げて参内したといい、菊水の謂れを語り、てっけん山に道しるべせんと告げて帰った。やがて彭祖は寿命長遠の仙薬菊水を与え、仙家に入る。冒頭のワキ次第は「君の齢は久方の、尽きせぬ御代ぞめでたき」。結びの文句「南陽県の菊水は、下流を汲んで齢を延ぶとて、彭祖は仙家に入りにけり」は三百番本「菊土童」とほぼ同文。

丁―菊水。明治新作。別名、正成。『未刊謡曲集』続三所収。明治三年大操館塾蔵版・大津屋市良兵衛刊の謡本がある(宗政五十緒・朝倉治彦編『京都書林仲間記録』によると明治四年刊中西嘉介本もあった)。作詞富谷通仙子、作曲井上宗

胤(京観世井上家六代)。楠正成の忠節を描いた短編で、謡物ともいえるが(丸岡桂『古今謡曲解題』では謡物とみなし「菊水(乙)」とする)、能として書いた未定稿らしく、田中允説に従い番謡(完曲)として扱う。幕末から明治にかけての尊皇の気風の時代思潮を表わしている作品で、明治最初の謡曲本かもしれない点に価値がある。明治から大正・昭和初期にかけて多くの楠公謡曲が作られた。観世流の現行曲「楠露」や金剛流の現行曲「桜井駅」もそのひとつで、今に名残をとどめている例。作者は富谷土岐三郎といい、秋田出身で当時京都の上京七番組小学校の教師。詳しくは西野「近代謡曲史考」(『能楽研究』第九号)参看。

戊―菊水。昭和新作。『未刊謡曲集』続三所収。昭和六十年四月檜書店刊本(観世流大成版)があり、著作権所有者は二十五世観世流宗家観世元正。詳しい前付があり、作者の項に「大楠公六百五十年祭に際し、湊川神社並びに奉讃会の要望により、観世宗家に対し、御祭神の湊川殉節を能に作り、御神前に上奏致度との要望有り、宗家は神戸観世会に一切を委任され、神戸観世会はこれを謹作せり」とある。同年五月、湊川神社能楽殿で上演。新作の中心になった藤井久雄氏に詳細な報告「新曲菊水上奏顛末記」(『観世』昭和六十年八月号)があり、実作に込めた情熱や体験がうかがわれる。水戸黄門の「嗚呼忠臣楠子之墓」の建碑の子細と明治天皇の御製「仇波を防ぎし人は湊川神となりてぞ世を守るらむ」、及び『太平記』正成討死のことなどを骨子として脚色。二番目(略脇能)。前シテ尉、後シテ正成、ワキ水戸黄門ほか。

【義士供養】 60

甲―義士供養。『未刊謡曲集』続三所収。同書の解題によると、管つづ観(難読)作の原作を梅谷先生が改正増補した「義士供養」を文化九年に写し、さらに文政四年に三木通明が写した謡本(田中允蔵『宇多意抄本』のうち)があるのみ。赤

穂華岳寺の僧が義士の木像を作り百回忌の供養を行い、高輪の泉岳寺に詣でる途中、山科の里で草刈男に逢い、大石良雄の旧跡を訪ね、主君の無念と大石が討ち入りを決意するまでを聞く。夜に入り、大石良雄の霊が本体を現わし、義士討ち入りの模様を語る。後ジテの登場歌に「風誘ふ、花よりも猶我身こそ、春の名残をいかにとやせん」との浅野内匠頭の辞世が使われている。討ち入りがあった元禄十五年（一七〇二）から百回忌を迎えたという設定であるので享和二年（一八〇二）ごろの成立であろう。

乙―甲の改作。近代の改作で大正二年刊本がある。『未刊謡曲集』続三所収。有吉敬三郎編・備生栄吉発行。『古今謡曲解題』「義士供養」の備考に「刊本二種は共に観世流の節附なり。赤穂義士追善の為に古本を翻刻せしものなりといふ」とあり、写本の存在によって、そのままの翻刻でなく短縮し改作したことが判明した。赤穂華岳寺の僧が義士供養のため義士の木像を作り、泉岳寺に赴く途次、山科の里で大石良雄の霊に逢い、義士討ち入りの話を聞く。百回忌のことは削除されている。なお、この改作が実演上不備が目立つため、福王流中村知一らによって再改定され翌大正三年に「大石」と改題して謡本が発行され（その後も小さな修訂を経て大正十三年と昭和十四年にも刊行）たことが、横山杢人「義士祭と新曲大石」（『観世』昭和十六年三月号）及び「大石」を翻刻した『未刊謡曲集』続二の解題にみえる。

【木曾願書】 61

甲―木曾・木曾願書。古名が埴生・埴生八幡。『謡曲評釈』七所収（木曾願書）。越前の燧が城を攻め落とされ、越中の砥並山に陣して、平家の軍勢に対峙した木曾義仲（シテ）はひそかに俱利伽羅落としての奇勝を計略、茂みのなかに新しい社を発見、従兵の一人（トモ）を所の者（アイ）に尋ねさせ、源氏宗廟の神の八幡神を勧請した埴生八幡であるこ

とを知る。覚明(ツレ)に命じて戦勝の願書を起草させ社壇に参り、自ら願書を読み上げ必勝を祈った。戦いとなり、今井四郎兼平(ワキ)が追手の大将と名乗って戦闘に突入したとき、社壇の上より神火ひとむら飛び上がり、源氏の軍兵を照らす。よく見ると鳩鳥を戴いた八幡の使者(軍神)で、悪魔降伏の矢を射放ち、平家の大軍を俱利伽羅谷に追い落とし、義仲は大勝を得る。『能本作者注文』は作者不明として木曾を、『自家伝抄』は十郎作として埴生の八幡を載せる。中作能。室町後期の演出を伝える『妙佐本仕舞付』の木曾に、後ジテの出立として鳩を龍台のようにし赤頭に小ベシミ(またはシカミ)の面に半切姿で松明を持って出る記事が見え、シテは木曾、後ジテは八幡の使者の、前後別人格が原態だったらしい。願書を読み上げるのもシテの木曾。

乙―木曾。観世流現行曲。甲の前場のみを独立させたような短編。俱利伽羅谷での大捷の前日の事件で、神の加護を祈って願書を読み上げる、出陣前の武士の勇躍する気色を描く。シテ覚明が「思ひ案ずる気色もなく、古書を写すがごとくに」願書を書き高らかに読み上げる場面と、八幡に社参して奉納し、酒宴をなし舞を舞う場面から成る。社壇から山鳩が飛び立ち吉兆を示したことは結びに謡で表現。義仲はツレ。甲より後の作品で、観世流が所演曲としたのも明治二十年七月以降。『謡曲叢書』『謡曲大観』ほかの活字本はほとんど乙の翻刻。

【北野】 62

甲―北野。『新謡曲百番』所収。筑紫方の僧が大唐より渡ったという経蔵一見のため北野社へ詣で、輪蔵を拝し謂れを聞く。夜に入り、法徳によって、輪蔵の守護神たる傳大士が普聞(普成)・普賢(普建)の二童子を伴って現われ、舞いを舞い、やがて五千余巻の経文を日夜に守護する十二天のひとり水天が出現し、僧を誘い転経の規式を顕わし、五千余巻の経文を披見させる奇蹟を描く。観世流現行曲で観世長俊作「輪蔵」の改作。前場をやや短縮し、後場は

ほとんど同文で、「輪蔵」のツレ火天を水天に変えた形。原作より数段劣る。天和二年刊『謡名集』以下の諸名寄に所見。近世初期の作品か。

乙―北野。『未刊謡曲集』続三所収。竹中実作詞・作曲の現代能で、『竹中実作品集』第六卷。謡本は昭和二十七年二月発行、三月伏見の大光寺で素謡として上演。作者については「祇園(乙)」の項を参看。前附の梗概に「時の帝北野の梅花祭に勅使を遣し給ふ。勅使北野に到れば老人夫婦現れこの宮居の梅の木は神木なりとて道具の梅花を愛し給ひし事などを語り衣笠山の方へ飛び去りぬ。ややありて天女現はれ次いで天満天神も白牛をつれて出現し往時のことどもを見せて暁の社頭にその姿を消しぬ」とある。協能(略四番)。

【吉備津宮】 63

甲―吉備津宮。『未刊謡曲集』四所収。『謡曲界』昭和十八年二月号所載。『能本作者注文』に金春善徳作とある中作能で、女の仇討物。筋がやや複雑。吉備津宮の社人(アイまたはトモ)が登場、社官宮野下野守信備(信満とも)が一族の隼人を京で殺害し、隼人の妻と一子宮千代がこの辺りに隠れていること、下野守が近日下向するので道を作らせる由を告げる。隼人の妻(シテ)は侍女(ツレ)に宮千代(子方)を呼ばせ、夫の忌日なので共に焼香し菩提を弔う。中務より使者(トモまたはアイ)が来て隼人の跡を継がせるため下野守に対面させると偽り、宮千代を連れて行く。間もなく中務からの使い(女。トモまたはアイ)が文と形見を持参、夫に続いてわが子まで謀殺されたことを知った隼人の妻は悲嘆にくれ自害しようとするが侍女に制せられ思いとどまる。やがて、下野守(ワキ)が参拝した折り、隼人の妻は御簾の陰から飛びかかり、夫とわが子の仇を討った。登場人物が多く、筋もやや入り組んでおり、いかにも室町後期の作品。金春善徳は金春座の太鼓方で金春弥二郎勝国。演出資料も伝わる。

乙—吉備津宮。磐山(岩山)とも別称し、甲とは全くの別作品。『未刊謡曲集』二十一所収。吉備津宮の御鳴動を聴聞せよとの宣旨を蒙り、吉備津宮に來た臣下の前に岩山の神靈が現われ、鳴動の謂れや神社の縁起を物語る(クリ・サシ・クセ)。夜に入り、神靈が姿を現じ、春の夜に袖を翻して直ぐなる御代を祝う。近世の作品。甲と紛らわしいので、別名の磐山(岩山)を立てたい。

【清水小町】 64

甲—清水小町。音羽小町とも。また市原小町・滝見小町とも別称する。いわゆる五百番本所収。『謡曲末百番』『謡曲叢書』二・『未刊謡曲集』二十一所収。前稿で検討した「市原小町(甲)」のこと。陸奥衣の関より出でたる僧が京の都清水寺に参り音羽の滝の前で、昔、小野小町が詠んだ歌(何をして身のいたづらに老いぬらん滝の気色はかはらぬものを)を口ずさみ痛わしく思っていると、女が呼び掛け、旅僧の心を愛で懐かしむ。やがて市原野辺に僧を道案内し小町であることを告げて消えた。読経し跡を弔う僧の前に小町の霊が現われ、懺悔に昔を語り、深草の少将の執心に狂気したこと、和歌の徳などを語り(クリ・サシ・クセ)、僧の値遇に引かれて仏果の台に至るや夢覚める。『未刊謡曲集』二十一所収曲の底本である下村本の末尾に「此諷大永ノ比細川高国ノ時觀世祐賢作之」とある。觀世祐賢作とするのは疑問だが、「通小町」から着想し、前後場とも小町一人にして法謝の舞を舞わせる趣向であり、名寄の類では天和二年刊『謡名集』以下の諸名寄に所見するので室町後期の作品としてよいであろう。

なお版本系と下村本とは小異があり、版本系は、後場の冒頭、待謡のあと経文を誦し(誦句)、クセの文句も「和歌の誉れ世にすぐれ」以下『古今集』仮名序の六歌仙評の一部を引き、舞の序歌が「夢のうちなる舞の袖、現つつに返す、よしもがな」となるのに対し、下村本は、誦句もなく、クセの文句が「比は弥生の半ばにて、梅の名残に

桜木の「以下、少将の百夜通いのことを綴りサシから自然につながり、「さるにても」と舞になり「さるにても、何か嘆かん露の身を」と歌い、僧の値遇に引かれて歌舞の菩薩となる。クセに關しては下村本がよいか。なお冒頭のワキ次第「悟りの外の心をば、むねなる月や澄ますらん」以下は両系ともほとんど同文。

乙―清水小町。絵馬小町とも別称し、内容的にも、また甲と区別するためにも絵馬小町を立てたい。『未刊謡曲集』一所収。甲と同工の所もあり、甲に学んだ作品らしい。石見の国浜田の大光院の僧が清水寺に参拝し、掛け並べてある絵馬の中に老女に小町の歌(侘びぬれば身を浮草の根を絶えて、誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ)があるのを見て、その果てを哀れみ落涙する所に、女が来て旅僧のやさしい心に感じ、市原野に住む女と告げ道案内をするうち、貴賤群集にたち紛れてしまった。市原野辺で僧が読誦し跡を弔っていると小町の霊が姿を現じ、回向を謝し山本の庵に導き、小町の歌の誉れ(クリ・サシ・クセ)や業平の玉津島詣でのことを語り、舞を舞う。全体の構成は「清水小町(甲)」に準拠し、僧が清水寺で参拝する所は「三井寺」、女が身の上を語る所は「卒都婆小町」、読誦の場面は「通小町」、クリ・サシ・クセは「鸚鵡小町」と「清水小町(甲)」というように、先行作品の影響が著しい。これも室町後期の能らしい。冒頭のワキ次第は「清き水上尋ねてや、花の都に急がん」。

【桐 壺】 65

甲―桐壺。『未刊謡曲集』一所収。『吉田名寄』ほか福王系の名寄に見えるのみ。近世の作品であろう。東国方の僧が都に上り、清水寺に参ろうとするが不知案内のため人の来るのを待つと、女がやって来て道知るべし、清水に程近い愛宕の寺に案内し、昔、桐壺の更衣を葬った所と教え桐壺の更衣の事を語り、回向を頼んで消えた。夜に入り桐壺の更衣の霊が現われ、懺悔に昔を語り(クセ)、いにしえの夜遊の舞を奏で、弔いを受けて成仏する。桐壺に取材

した能がないのを惜しみ、書いた作品か。詞章の上からも『源氏物語』桐壺の巻に拠っていることが明白。

乙―桐壺。『未刊謡曲集』続三所収。竹中実の作詞・作曲にかかる現代能。昭和二十七年九月発行の謡本があり、十月に伏見の大光寺で素謡で初演。「明石」「若紫」に続く源氏三部作で、作者は甲の存在を知らなかったと思われるが、同じような脚色となっているのは、興味深い。梗概は「石山寺に参籠の僧、或る夜不思議の霊夢を蒙り、都愛宕寺に参りけるに一人の女性来り、石山寺より来れる人ならばその御墓に参り給へと桐壺の事を詳しく語りて姿を消しぬ。その夜、僧は墓前に桐壺の跡を弔へば、桐壺の霊御遊の舞姿にて現はれ、今は亡き恨みも晴れたりとして、花の舞などを舞ひ、やがて暁の古塚に帰り去る」とある。

【公任】 66

甲―公任。朗詠谷とも。『未刊謡曲集』二十一所収。同書の底本の下村本に永田由佐作自章とあり、永田由佐の作詞・作曲と思われる。永田由佐は元禄十四年に「西の京」も作っており(下村本)、元禄頃に活躍した人のようである。

しかも元禄二年高橋清兵衛刊の進藤流の『曲舞』の奥付によると進藤以三(進藤久右衛門忠次の嫡男。ワキ方進藤家を継がず延宝頃まで謡で活躍していたらしい)の弟子であることが知られ、本曲は紛れもなく近世の作品である。内容は、春、東国方の者が都に上り岩倉に着き、所の老人から朗詠谷の謂れを聞き、また朗詠集の中の二三の詩歌について質問、老人は詳しく答え、ついで大覚寺へ道知るべし古跡滝殿へ案内して、和漢の詩歌の徳を語る(クリ・サシ・クセ)。やがて老人は公任であることをほめかし客人を慰めようと告げて消える。その夜、朧月夜の山陰より公任卿の霊が現われ、舞楽を奏し、霞の内に昇天していく。公任が教通に掣引出物として『和漢朗詠集』を与えたこと、詩の祖を大津の皇子とする説などは寛文十一年刊『和漢朗詠集註』巻第一の冒頭の説に拠ったらしい。天和二年刊『謡

名集』以下の諸名寄に見える「公任」は国付けが相模で、甲とも、次の乙とも合わないが、相模に続く武蔵の誤りとすれば乙かもしれない。

乙―公任。隅田川の口とも。斎藤香村「番外稀曲解題」(謡曲講座第二期所載。計一〇八番)に報告されているが、本文の存否未詳。同解題に「シテ僧公任、ワキ人商人関戸、ツレ里人、子方梅若丸。所武州隅田川。季春。曲柄雑の能」とあり、梗概は「武蔵の国の僧公任、隅田川のほとりを通り、人の群集するに足を留むれば、都吉田少将の子梅若丸が、今しも人商人関戸に捨てられ路辺にて絶息せるなりき。公任これを憐み懇ろに弔ふ。現行隅田川の前編とも称すべきものなり(番外六百番集、第二輯)」という作品。別名の「隅田川の口」は「隅田川」の前編という意味であろう。近作能か。伝本の発見に努めたい。

【楠正成】 67

甲―楠正成。湊川正成とも。正成正末とも別称したか。『未刊謡曲集』九所収。同書の各曲解題に記すように、楠公物のひとつだが、他の楠公物と違い、正成をことさらに忠臣とせず、戦いに敗れた一人の武士として描き、詞章・脚色とも整っており、比較的成立が早いかもしれない。諸国一見の僧が西国行脚を志し、須磨の浦、湊川に着くと、俄かに日が暮れたので、来合わせた浦の老人(海士)に宿を乞う。塩屋に案内された僧は、夜の更けるにつけ何やら馬足の繁く聞こえるので尋ねると、老人は楠正成の湊川合戦のことを語り、正成が自害した所でその魂魄の執心がなおここにとどまっていると言い、急に雷雨激しくなるや修羅の時が来たと告げ、楠の幽霊と明かして消えた。僧が読誦し跡を弔っていると、正成の霊が現われ、懺悔に、正成正末兄弟の奮戦、手に手を取って刺し違えた昔の有り様を語り、修羅の苦患を見せ回向を願って消え失せた。「松風」や「八島」の趣向を借りており、松風・村雨では

ないが、正成・正末兄弟の奮戦を描き、二人が刺し違える場面が頂点となっている。正末は登場しないものの、重要で、下村本の内題下に「イニ此諷正成正末ト云非也。正末ハ不出」とあり、異本にこの作品を「正成正末」と別称したことも知られる。右に述べた特色から見て「正成正末」と称しても不思議はなく、「非也」とする下村本の注記は誤解であろう。「正成正末」とも別称した可能性は高い。

乙―楠正成。正成ともいい、正成が通名。他に楠木・千劔破・赤坂・金剛山(乙)とも別称。正成で『未刊謡曲集』三所収。延宝二年刊本(能楽研究所所蔵。『楠公叢書』第三輯にも翻刻あり)。秋、かつて弓矢の道に携わり今は天王寺辺に住む僧が金剛山に詣でる途次、赤坂の古戦場で二人の柴人から、赤坂城の事、正成の機略と武勇潭、後醍醐天皇に対する正成の忠節を聞く。柴人は正成の幽霊と明かし、千早の里を尋ねるよう告げて消える。僧が千早城に来て亡き跡を弔うと、正成の霊が現われ、湊川での正成正季の獅子奮迅の戦いの様を物語り、仏果を得る。難解な漢語を多用し、こなれていない。後場は「八島」の影響が見られる。延宝二年二月刊本は刊者不明で、一見、整版車屋謡本のような形式。クルの使用が多い。江戸初期の作品か。石田本『笛手付』に笛の頭付があり、『狂言集成』に間狂言が収められている。

【屈原】 68

甲―屈原。『未刊謡曲集』九所収。乙と同工異曲。『吉田名寄』『遠キ諷組』田中允蔵『謡千番外題』(近世中頃の写本)に見える。江浜に流謫された屈原が作った『楚辞』漁父の詩「滄浪の歌」に取材した、漢語の多い作品。江浜に流謫の身となった屈原をワキに、滄浪の漁父をシテ・ツレにして、「滄浪の歌」そのままに展開。結末に「漁父はこれを聞くよりも、莞爾と笑つて、舟ばたを敲ひて、謡ふや棹の歌」と綴り、「滄浪の」と舞になり、「滄浪の水、す

めらば纓を濯ふべし、濁らば足を濯ふべし」と眼目の詩歌を盛りこむ。『楚辞』漁父の歌（滄浪の歌）を愛し、その生き方に共感して作ったらしい、近世中期の作品であろう。

乙―屈原。朝日本第一種にのみ伝わる。『未刊謡曲集』続三所収。ワキは屈原、シテは漁父。結末の舞（太鼓楽）前後の詞章が「（ふなばた）柵を扣き滄浪の」で舞になり、「水すまば、纓を洗ふ、水濁らば、これをすすげ」とあり、眼目の歌を盛り込むところなど甲と発想が同じで、全く別々に作られたとも思われず、甲を極端に省略改作したのが乙か、とも見られる。甲より劣る。名寄の屈原は甲の方であろう。

【熊】 69

甲―熊。佐和とも別称し、『未刊謡曲集』五に佐和で所収。謡本は熊が圧倒的に多く熊が通名と思われるが、乙・丙と区別するにはシテの名でもある別称の佐和を生かしたい。甲乙丙の三番とも同工異曲で、同文の所もある。越後守師泰（ワキ）は主君の命により石見の国江の川に到着、青杉・松尾・鼓が崎の城に佐和の善四郎が立て籠もり、なかなか落城しないので、配下の者と談合し夜討ちをかけることにし、二十七人が小篠・刈萱を鎧甲に差し挟んで忍びよる。一方、石見の国の住人佐和の善四郎（シテ）は当国の者共の謀反のため手勢数名で籠城していたが、兵士たちは二十七騎の計略にかかり、騒ぎで熊が逃げて行くのを追い掛けて城の麓まで出て行った隙に襲われ、奮戦するも多勢に無勢、ついに自害して果てる。『太平記』卷二十八、三角入道謀叛の事に取材した斬合物。同書の「兵野に伏すときは飛雁行を乱るるといふ兵書の言葉を知らましかば、熊故に城をば落とされじと、世の嘲りになりけり」を劇化したもの。貞享四年『能之訓蒙図彙』以下諸名寄に所見。『太平記』物であり、室町末期の作品か。

乙―熊。『未刊謡曲集』二十二所収。甲とほとんど同じ構成ながら、寄せ手の忠次の側から描いた能で、ワキは越後の

某、シテが二十七騎のひとり神田の八郎忠次で、シテ・ワキ一緒に甲と同文の次第「ここ石見瀉江の川や、波を枕の住居かな」で登場し、談合となり、立衆と夜討ちをかけ、ツレ佐和の善四郎が孤軍奮闘するも及ばず、自害せんと櫓に上がるを縄かけられ城外へ引き立てられる。甲と比較してやや短く、前半が近似し、乙は甲の改作らしい。

丙―熊。『未刊謡曲集』九所収。乙とはほぼ同じ構成で、ワキ越後の守師安がシテ多田の忠次を呼びだし談合、夜討ちをかけ、ツレ佐和の某が立ち向かうも敗れ、縄打ちかけられ、忠次は喜び勇む。乙とは後半が似る。乙と同じく忠次の武勇を描き、乙を短縮したらしい簡略な形。恐らく甲が原作で、それを改作したのが乙で、さらに短編に仕立てたのが丙であろう。

【熊がひ】 70

甲―熊谷・くまがへ。天和二年刊『謡名集』は未勘国に、貞享四年『能之訓蒙図彙』所収「謡目録国付」は武蔵に見え、以下近世の諸名寄にも見えるが、本文伝わらず、散逸したらしい。一説に敦盛の異称かとするも不明。熊谷次郎直実に取材した作品か。近世後期の次項の乙ではあるまい。

乙―熊がひ。尊経閣文庫本(近世後期写観世流節付)があるのみ。『未刊謡曲集』続三所収。山城山科の里に住む者、九つの春の頃、松原山の小松が原で袂に入るほどの熊の子を見つけ養育し、その熊が成長し自分を守護してくれる熊の恩愛の情を称える。やがて熊が登場し威勢を示す所に、熊(の掌)を狙う夜盗が忍び入るが、熊に咆られ蹴散らされるところという趣向。「熊飼」としたい内容で、二場型で装束付や間狂言(二人)の文句もあるが、このままでは上演は無理。近作能。

【熊坂】 71

甲―熊坂。幽霊熊坂とも別称する。天和二年刊林本・同野田本外百番本（いわゆる二百番本）所収。現行曲「熊坂」。『謡曲評釈』五・『謡曲叢書』一・『謡曲大観』二・『解注・謡曲全集』六ほかに所収。旅僧の前に名高き盗賊熊坂の長範の幽霊が現われ、回向を願う。その夜、熊坂が本体を現じ、金売り吉次が牛若丸を伴い奥へ下るのを狙い、略奪せんと夜討ちをしたが牛若に撃たれ、命を落とした有様と、その無念さを語る。『能本作者注文』には作者不明として幽霊熊坂を掲げ、『自家伝抄』は宮増作として幽霊熊坂を掲出。中作能。永正十一年十月二十八日の南都雨悦びの能に「ユウレイ熊坂」上演（『申楽談義』後人追記）。ユウレイの注記は乙の現在熊坂（烏帽子折）と区別するため。

乙―烏帽子折の別名。熊坂・現在熊坂とも別称するが、現在熊坂には同名異曲があり（現在熊坂の項参看）、紛らわしいので現行曲の名である烏帽子折を通名にしたい。刊本では下掛りの最初の外組本（寛文末年までには刊行）から見える。『謡曲評釈』八・『謡曲叢書』三・『謡曲大観』五・『解注・謡曲全集』六・日本古典文学大系『謡曲集』下ほか所収。弟吉六と共に奥州へ下ろうとする金売り吉次信高に、牛若丸が鞍馬寺から下りて同行を求め、江州鏡の宿で、烏帽子折（烏帽子屋）の亭主（シテ）に左折りの烏帽子を折らせ、その礼に刀を与える。烏帽子折の妻が鎌田正清の妹と知り、思いがけなく対面。やがて美濃の赤坂の宿に着く。その夜、盗賊熊坂長範（後シテ）の一党が押し入るが、牛若丸が斬り倒し、ついに長範をも討ち取る。『看聞日記』永享四年三月十四日の条に見える伏見宮御所での矢田猿楽の演能曲目中の「九郎判官東下向」がこの能と推測されている。大系本『謡曲集』で横道萬里雄氏が指摘されるように、前シテが祝福者、後シテが敵対者という脚色は劇的で「舟弁慶」などもこの形、前後が逆ながら「調伏曾我」も同じ趣向で、他の作品にも影響を与えている。『能本作者注文』には作者不明として熊坂を掲げ「現在の事也」と注記し、『自家伝抄』（九大本）は宮増作として熊坂を掲出し「現在」の注記がある。東下りとも。「現在熊坂」の項参

看。

【熊野詣】 72

甲—熊野詣。兼元の別名。熊野参詣・熊野参とも。元禄二年刊三百番外百番本(いわゆる四百番本)ほかの版本及び写本で伝わる。ただし四百番本の翻刻である国民文庫本『謡曲全集』下巻は、卷之十が普通の流布本「淡路・植田・身売・熊野詣・合浦」ではなく「二見浦・愛寿忠信・飛鳥川・籠尺八・合浦」の本を採用している。『謡曲叢書』一(兼元)・『未刊謡曲集』十六所収。写本・版本合わせおびただしい異本があり、およそ①四百番本系、②謡曲叢書系、③観世番外本系(未刊謡曲集)の三系統に別れるが、それぞれの系統の諸本間にも小異がある。最も詳しく原形らしい①によって梗概と構成を示すと、冒頭に和泉の国真木尾寺の住僧(ワキ)が登場、下野国の住人那須の兼元殿の子花若を預かっているが、奥よりの道者が言うには兼元夫婦が熊野参詣のため近日寺に立ち寄るとのことなので、能力(アイ)を呼び寺の清掃を命じ、また花若の学問の様子を尋ねるのであるからと、花若(子方)を呼び出し尋ねる。花若は同宿の坊の稚児たちと遊びに熱中し学問を怠っていると、叱責し追い出す。師匠に叱られたことを嘆き、花若が本堂近くの池に身を投げたとの報告を受けた僧は狼狽し、出奔しようとするが能力にたしなめられ、二人で死骸を持仏堂に安置する。一方、兼元(前シテ)は妻(ツレ)を伴い、先達の客僧(ツレ)以下山伏たち(立衆)と熊野参詣のため、真木尾寺へ到着。花若と対面を願うが僧から花若入水の次第を聞き驚く。客僧が死骸を見た者は熊野参詣は出来ないと忠告するが、夫婦は熊野参詣を断念して花若の死骸と対面、悲しみにくれ、土産にと曳かせて来た馬・鞍・太刀や小袖・直垂を与えつつ慨嘆する(ここに③はクセが入り、おおむね上掛りは藍染川のクセを、下掛りは鍾馗のクセを借用。①②にはクセはない)。兼元夫婦の悲嘆を先達の山伏は哀れに思い、熊野権現を勧請して、花若の

蘇生を僧と共に祈ると、熊野権現の使者護法善神(後シテ)が出現し、花若の命を助け、行く末を守らんとする神託を告げる(キリは二系統とも大異はないが③は護法のキリとほぼ同文)。

問答が多く長大な①が原形で、②は僧が狼狽する場面などを削除して短縮し、③はさらに整理しつつクセなどを加えて叙情性を持たせている。『能本作者注文』に近江能として熊野参、『自家伝抄』に宮増作として熊野参を掲げている。中作能。演能記録では、文明十年四月二十三日、新町室町誓願寺辺観世勸進能の二日目に熊野参を演じているのが早い(『大日本史料・第八編之十』親元日記)。

乙―くまの詣。『未刊謡曲集』二十七所収。伊達本にのみ伝わる近世の珍曲。常に歩みを運ぶ都の熊野信者がこの春も熊野に参詣したところ、飛竜権現が諸神を従えて影向するという奇特を見る。稚拙な一場型の短編。

【黒川】 73

甲―黒川。黒川延年とも別称。『未刊謡曲集』一・十九所収。鴻山文庫の吉川家旧蔵車屋謡本「黒川」の末尾に「(金春禅鳳)夢想之五番之内」とあり、作者は金春禅鳳と思われる。金春禅鳳には「夢想之五番(または夢中之五番)」といわれる作品があり、現在、「黒川」のほか「生田(生田敦盛)」と「初雪」の、都合三番が判明している。これらは、禅鳳の特色のひとつ、子方の活躍する趣向から見てもその蓋然性が高い。奥州の住人黒川遠江守(ワキ)が会津豊前守との戦いに敗れて籠城したとき、八幡大菩薩の霊夢を蒙り、財宝を焼いて泰山府君を祭る。やがて敵が襲い戦うも利あらず、自害しようとしたとき泰山府君(シテ)が現われて勝利に導き、死すべき命を延ばす。シテの泰山府君は後場だけに登場し、黒川の危機を救うという儲け役で、子方にして活躍させることもできる。諸本間に異同が多い。大蔵虎清本間狂言(『古本能狂言集』三所収)に「くろ川 間」として「をしみだいこ なかば あしがるいで」

おひ入也」とある。切合い物の内容から見て、たぶん本曲の間狂言であろう。『いろは作者注文』以下の諸名寄に見える。乙と区別するため黒川延年を生かしたい。

乙―黒川。『未刊謡曲集』続三所収。底本は宝生流節付の元禄五年の写本。雪国の秘事能として名高い山形県櫛引町の神事黒川能に取材した作品で、鶴岡藩の能役者らしい藤野清三郎が元禄五年以前に作った近作能。睦月二十日余り、諸国一見の者が出羽の庄内を尋ね、黒川寺尾村の新山明神に参詣し、老宮人から四方の景色や新山明神の正月の神事(大地踏み)の謂れを聞く。やがて神前の鳥居の杉の精と告げて消える。夜に入り、本体を現わした杉の精が夜遊の舞楽をなす。老神職が出る前場は「蟻通」にやや似た形で、短編ながら整っている。

【黒 谷】 74

甲―黒谷。『未刊謡曲集』二十二所収。法然謡曲の一つ。法然上人の流義を受けて念仏門に入った筑前の国高良山の僧が都東山黒谷の上人の旧跡を訪ね、所の者に上人自作の御影、自筆の一枚起請を拝ませてもらい、上人が勢至菩薩の化現であることを聞く。やがて「我こそ智者のふるまひをせずして愚癡立ち帰り、ただ一向に念仏を申せと勧め」た勢至菩薩の再来と告げて御厨子に消えた。夜に入り、紫雲たなびき異香薫じ御厨子の扉が開き、勢至菩薩が姿を現わす。衆生を救うために仮に源空と顕われたと告げ、念仏の功德を称えて西方へ飛行していった。下村本によると後場の出は「海士」に準ずるらしい。なお、伝本は下村本の他に新出の大和田本(後述)もあり、『享保六年観世大夫書上』所載謡名寄『吉田名寄』『大和田名寄』など所見の黒谷は本曲をさすと思われる。近作能。

乙―黒谷。『未刊謡曲集』続三所収。底本は福王系の江崎本(近世中期頃写)。東国方の僧が伊勢参宮の帰途、黒谷の上人の庵室を訪れ、出難の要道、弥陀如来の御利益、三社の御神詠の謂れなど法話を聞く。やがて旅僧は帰り、上人

は跡を見送り庵室に入る。これも法然謡曲の一つで、伊勢参宮が盛んだった宝永ごろの成立らしい。江崎本『諷名寄』所見の黒谷は本曲をさすようである。

【黒主】 75

甲―志賀の別名。志賀黒主・大伴とも別称する。金春を除く四流の現行演目。『謡曲評釈』八・『謡曲大観』二・『解注・謡曲全集』一ほか新潮日本古典集成『謡曲集』中に所収。当今の臣下が江州志賀の山桜が盛りなるを見んと訪ねると、樵の翁(山賤)と樵夫が花を手折り薪に添えて花の蔭に休んでいるのを見る。やがて樵翁は古今集のことや和歌の道を説き、聖代をことほぎ、大伴の黒主の霊であることをほのめかして消える。夜、志賀の明神と斎われた黒主の神霊が現われ、散る花の雲の羽袖を返しつつ神楽を奏する。『能本作者注文』に世阿弥作として黒主、『自家伝抄』に世阿弥作として志賀黒主の名が見える。『運歩色葉集』に能名としてあげている黒主(大伴と注記)をはじめ演能記録の黒主は志賀を指し、次項の乙ではあるまい。素材・構想・詞章等に世阿弥の特色が顕著で、その可能性は高い。

乙―黒主。『未刊謡曲集』五所収。甲が男神物であるのに対し乙は鬘物。北国方の僧が都一見の途次、志賀の里で由ありげな神社について来合わせた現に尋ねると、和歌の道を守る大伴の黒主を斎った志賀の明神と教え、黒主は美男の誉れ高く、幼なじみの隣家の娘(紀氏)に慕われ、つくも髪のお女に姿を変えての求愛に取り合わなかったところ、女は「たはれをと我は来つつを宿かさず、我を返すはおそのたはれを」の歌を残し、無情を恨んで淵に身を投げたと話し、回向を願って消えた。僧が千手陀羅尼を誦読していると、紀氏の娘の霊が現われ、功力により都卒天に生まれ変わったことを喜び、花を受けつつ法謝の舞を舞う。

黒主を業平と同様、美しく風流な遊士と捉らえていた伝承を物語るおもしろい作品で、遊士ⅡたはれをⅡ色好みとの理解は世阿弥の『三道』に「男体には、業平・黒主・源氏　かくのごとき遊士」とある記事を納得させ、老女姿に扮しての求愛譚は『申楽談儀』に見える散佚曲「石川女郎の能」をも連想させる。室町末から江戸初期の作品か。元禄四年写の『謳百番目録』（能楽研究所蔵）所見の黒主は、樺表紙本（田中允蔵番外謡本）に一致する目録の所に見えるから本曲をさし、江戸中期の諸名寄に散見する黒主も本曲をさすと思われる。甲は志賀を、乙は黒主を通名にするか。乙を陀羅尼黒主とでも別称するか。

【荆軻】 76

甲―荆軻。『番外謡曲』正所収。秦の始皇帝の臣下が登場、燕の太子丹の兵士の荆軻と秦舞陽が秦の叛將樊於期の首と燕国の地図とを持ち使者として始皇に会見、刺殺しようとしたが花陽夫人の秘曲に聴き入り眠ったので未然に防ぎ、二人を討ち取った事を告げ、帝が二人の首を見たいとの希望なので庭上に差し出すよう命ずる。帝が出御し、見ようとすると、臣下が眉間尺の故事を語り、銅の網越しに見るよう進言する。帝が燕の丹太子の白頭烏角馬の話を物語り（クリ・サン・クセ）、荆軻と秦舞陽を類いなき悪人なりと言って笏で首を打つと、雷電稲妻光り豪雨となつて荆軻と秦舞陽の亡魂が現われ帝に復讐するが、臣下の蘭省が剣を抜いて闘い、二人の怨霊は銅の網に遮られて近づくことが出来ず、重ねて本意を遂ぐべしと告げて虚空に消えた。

福王系の写本に伝わる。現行「咸陽宮」（古名、秦始皇）の後日談で、かなりグロテスクな内容。『謳番組』（鴻山文庫蔵）ほか近世の名寄や明治の『松尾名寄』に所見。江戸初期の能か。曲舞は観世小次郎作の廃絶曲「二人神子」（内海とも）に見え、同曲からの借用であろう。各種の曲舞集に採られ、広く流布した（『謡曲評釈』曲舞集にも所収）。

乙―荊軻。『未刊謡曲集』十所収。甲とは逆に「威陽宮」の前篇とも見るべき作品。シテ荊軻が登場、秦の始皇帝の捕虜となり牢獄の身となった燕の太子丹が、あるとき烏頭馬角の戯れ事を天に祈り、願いが叶って釈放され帰国したこと、始皇帝の一族樊於期が謀叛を起こしこの国へ逃げ、始皇帝が樊於期の首と燕の国の地図を持参した者には望みを叶えてやるとの高札を立てたことを樊於期に話すと、樊於期は始皇帝を討つべしと自ら首を刎たので、大剛の田光力士を語らい秦の国へ赴こうと名乗る。供の者を召し、田光を呼び寄せ相談するが、田光は心勇めども老衰のため叶わぬと辞して受けず、この大事を漏らさぬように言われ、もし漏洩した時に疑われるのも恥と、李木に向い自分で頭を砕いて死んだ。荊軻は樊於期と田光の志に感じ、このうえはと秦舞陽を語らい、燕丹もこれを聞き門出を祝い、荊軻は舞い、威陽宮へ急ぐ。

冒頭、状況を説明する長いセリフから始まるのは「張良」に学んだらしい。詞章・脚色とも比較的整っている。これも江戸初期の作品か。なお現行「威陽宮」も荊軻と別称したらしい。

【兼好法師】 77

甲―兼好法師。兼好とも別称するが、『未刊謡曲集』続三所収の「兼好(ならびの岡)」とは別曲。『未刊謡曲集』十六所収。春の頃、都に出立した西国方の遊子が花の盛りもやや過ぎた神楽岡に着くと、いずれも多き花の中に取分きしおれたる花を眺めている者に会い、「花は盛りに月は隈なきをのみ見るものかは」などと言葉を交わし、懐旧の念に感じた様子で、やがて花の木陰に臥して我が有様を見給えと告げて消えた。夜に入り、墨染の衣姿の吉田兼好の霊が現われ、徒然なるままに硯に向かう言の葉をと「いでやこの世に生まれては」などと『徒然草』の一節を語り、墨染の袖を翻して舞を舞い、「花の色のその精霊」と言うかと思えて消え失せた。

兼好に取材した作品は、このほかに次項の兼好法師(乙)、堀江大夢軒の家従長谷川瑞翁軒作の兼好塚(元禄十三年井筒屋刊の版本がある。兼好の霊が伊賀の墓所に現われ昔を語る。『未刊謡曲集』二十三所収の種尾のこと)、兼好桜(兼好が艶書代筆のことを弁解するという戯謡。『未刊謡曲集』二十七所収)、徒然草(徒然草を愛読する洛中の者が友を訪ね、徒然草の秘事を聞く。元文写本所収であったが震災焼失、『古今謡曲解題』で梗概を知るのみ)、ならびの岡(兼好・つれづれ草トモ。清少納言の霊が兼好を訪れ、徒然草を誉め舞を舞う。『未刊謡曲集』続三所収)、御室(御室八景トモ。広沢の月を見んと訪れた八瀬の僧の前に兼好法師の霊が侍童命松丸と共に現われ、名所を教え、舞を舞いもてなす。『未刊謡曲集』四所収)、洛西隠士月洩軒我笑作の白うるり(丹後の橋立一見のため訪れた兼好法師の前に白うるりの魂が現われ、天神七代の謂れや、しろうるりの来歴などを語る。刊年刊者不明の版本あり。未翻刻。『能楽研究』第九号所載の拙稿「享保前後の新作曲」参看)、などの諸曲があり、『元禄大平記』四の三(元禄十五年刊)に「それがし幼少より諷を好いて、和板にあまねき謡本、五尺手拭をはじめ兼好塚まで、さらに覚へ候へども」などとある。本曲が伝本も多く、よく整っている。上記の作品は殆どが江戸期の成立で、元禄五年の書籍目録に見える「兼好法師謡」は流布の状況から見て本曲をさすかもしれない。名寄では、江崎本『諷名寄』に兼好、尊経閣本『謡名国付伊呂波寄後人加筆之部』・江崎本『遠キ諷組』などに所見。

乙―兼好法師。徒然草とも。『未刊謡曲集』十所収。非真非俗の処土が花を訪ねて西山に遊び、ならびの岡で、花守から兼好法師が植えた桜のこと、徒然草の執筆の目的、主題、要諦などを聞く。夜に入り、夢中に兼好の霊が姿を現わし、艶書代筆の事に対する世評などを語る。前場に徒然草の本文をかなり引用してクリ・サシ・クセとするが、文章・構成ともに生硬で拙い。名寄では甲に記したように江戸中期以降の名寄に見え、江戸中期の成立であろう。江戸初期以降、甲乙を含めて『徒然草』や兼好に取材した能が八種も作られている事実は、『徒然草』の享受史を考える上でも興味深いことである。

【現在熊坂】 78

甲―現在熊坂。長範とも別称。元禄二年刊三百番外百番本(いわゆる四百番本)・『謡曲叢書』一所収。三条の吉次信高(ウキ)が牛若(子方)を伴い奥州へ下る途中、美濃の国青墓の宿で盗賊熊坂の長範(シテ)とその一党の夜襲を受けるが、牛若の獅子奮迅の働きで熊坂とその手下を切り伏せ、熊坂があしたの露と消える。現行「熊坂」を現在能に仕立てたもので、牛若と長範が組み合う場面は「熊坂」後半の詞章を借用している。牛若には謡がない。これといった山場もない平凡な短編。『謡名集』以下の諸名寄に所見。江戸初期以降の作品か。

乙―現在熊坂。『未刊謡曲集』続三所収。甲があまりにも短く内容に乏しいので増補改作したものと思われる。まず牛若に開口の役を回し、名乗り、三条吉次と共に奥州へ下る由を述べてから次第になる。つぎに熊坂が登場、吉次一行の宝を狙っている事を手下の者に告げ、暮れるのを待つ。この場面に熊坂が盗賊稼業を反省するくだりを入れ(クリ・サシ・クセ)、涙ぐみ、手下の者にそんな弱気では困ると力づけられ、門出の酒宴をなし羯鼓を舞う場面が新工夫で、クセの文章も悪くない。後場は夜討ちの場面で、武装した長範が登場し「伴ふ者は誰々ぞ」と手下の者の名を列挙する点もおもしろく、切り合いは甲と同じく「熊坂」の詞章を借用しているが、乙の方が全体にうまい。結びも斬られた熊坂を「あしたの露と消えにけりや」と綴ったあと「牛若は思ひもよらぬ、多くのかたきを打ち取つて、門出よしと悦びて、奥州さして下りける、心の内ぞゆゆしき、く。」と留め、首尾を一貫させている。

丙―現在熊坂。現行「烏帽子折」の別名で、「烏帽子折」が一般的。『太鼓之名寄』(太鼓観世流宗家観世元信氏蔵)に「現在熊坂烏帽子折共云」とあり、また了随三百番本(法政大学鴻山文庫蔵)の「烏帽子折」に「現在熊坂共云」とあるので、現行「烏帽子折」を「現在熊坂」と別称したことが知られる。かりに丙とした。

【現在忠度】 79

甲―現在忠則。『未刊謡曲集』一所収。甲乙丙とも忠則(忠度)の都落ちに取材した同工類曲で、このうち甲だけがやや違い、乙と丙とは趣向も同じで改作関係にある。甲は、薩摩守忠則(シテ)が登場、都落ちに際し、供の者(ツレ)に平氏の二類に二心あると承る者がいるかと尋ね、供の者は池殿のことを伝え、二人は春日の明神の神託や小松殿の公達のことなどを語る。やがて忠則は三位の入道釈阿に逢うためと引き返し三位殿の館を訪ねる。館の者(アイ)との応対の後、歌の師釈阿(ワキ)と対面、和歌への妄執から引返したことを告げ、歌の巻物を託し勅選の沙汰ある時の入集を頼み、和歌の徳を語り(クリ・サシ・クセ)名残を惜しみつつ馬上の人となった。前半が少し堅いが三位の館の場面からは文章もこなれ、和歌の徳を物語るクセは流麗で、クセの後半は入道釈阿の感慨を叙し、独立させてもいい詞章。しかし能全体としては普通の出来。貞享四年刊『能之訓蒙図彙』以下の諸名寄所見の現在忠度が甲乙丙のどれをさすかはわからない。

乙―現在忠度。『未刊謡曲集』十七所収。甲とほぼ同じ梗概だが、甲には次第がなく、乙は薩摩守忠度(シテ)が次第「御幸をはやむ小車の、やる方いづくなるらん」で登場。平家一門の都落ちに際し、忠度は狐川より夜に紛れて引き返し、五条の三位俊成(ツレ)の館を訪ね、俊成に対面。一門の滅亡を悟り、勅選の沙汰あらば加えて欲しいと年来の詠草を渡し、俊成も涙にくれ約束する。やがて名残惜しみに和歌の道を語り(クリ・サシ・クセ)、名残の宴をなし、師弟共に舞い、忠度は駒に鞭打ち、俊成は見送る。俊成が歌の望みを聞き入れたときの忠度のセリフ「さては安堵申し候、このうえは身を西海の底に沈め、骸を山野にさらすとも、今は憂世思ひ置く事なく候」や、舞の前後の詞章「前途程遠し、思ひを鴈山の暮雲に馳す……」など『平家物語』の引用が効果的で、クリ・サシ・クセは『古今集』仮名序に取材している。中作能か。

丙―現在忠度。『解注・謡曲全集』五・『未刊謡曲集』続三所収。金剛流の現行曲で、明治年間、所演曲とする際に古写本(恐らく乙系)に基づき、シテを俊成に、忠度をツレにして立衆と共に登場させる。乙の短縮・改作で、クリ・サシ・クセはほぼ同文。師の俊成が歌の道を説くのが自然なのでシテを俊成にしたのであろう。冒頭の次第は「弓張月の西の空、行方や定めなかるらん」。梗概は乙と同じ。

【現在田村】 80

甲―巖頭の別名。鈴鹿・鈴鹿田村・鈴鹿姫・鈴鹿山・現在田村とも。鈴鹿で貞享三年刊二百番外百番本(いわゆる三百番本)・『謡曲叢書』二所収。坂の上の田村丸(ワキ)が勅命により鈴鹿山の鬼神高丸(シテ)を征伐せんとした時、高丸が安達ヶ原の鬼女に心を移したことを恨んだ高丸の思い人鈴鹿姫(ツレ)の心変わりによって、田村丸は味方を得、力を合わせて高丸を打ち取る。安達ヶ原のまれ人をもてなす酒宴に遅参した鈴鹿姫が「下り端」で登場する場面や、切り合い場面の詞章はおもしろく、「がんせい」などの中世語も見える。『いろは作者注文』に巖頭、『運歩色葉集』に鈴鹿山、天和二年刊『謡名集』以下の諸名寄に鈴鹿・巖頭の曲名で所見。現行曲「田村」の後場で語られる鈴鹿山の鬼神退治を現在能に脚色したもの。黒川能では現行曲。

乙―清時田村の別名。清時・現在田村・田村清時とも。清時田村で元禄二年刊三百番外百番本(いわゆる四百番本)・『謡曲叢書』一・日本文学大系『謡曲』古曲拾遺所収。奥州三つの浜の鬼神を退治せよとの宣旨をこうむり、田村清時(ワキ)は泊瀬の観音に詣で祈願すると、観音の化身(前シテ)から一匹の名馬を授かる。これに乗り奥州三つの浜に下り、むくりの大将かんやしやう(後シテ)と戦い、討ち取る。『いろは作者注文』に清時田村で見え、室町時代の作品。短い二場型の能だが、前シテを祝福者、後シテを敵対者とするのは烏帽子折と同じ行き方。なお本曲の次

第・道行を削り、そのほか改竄・短縮した明治三十五年刊の金剛流謡本「清時」があり、当時、金剛流では正式の演目ではないものの演じていたようである。

【現在巴】 81

甲―今生巴の別名。貞享三年刊二百番外百番本(いわゆる三百番本)に今生巴で収められ、『謡曲叢書』一 所収。栗津における木曾義仲最後の戦いに、愛妾巴御前が奮戦した有り様を描く。現行「巴」を現在能にした形。最後の戦いと覚悟を決めた木曾義仲(ワキ)は、栗津の原で後を慕って来る女を兼平(ワキヅレ)に尋ねると巴御前(シテ)なので、兼平に命じ陣に召し、巴の心に感じつつも落ち延びるよう強制する。巴は名残を惜しみつつ泣く泣く帰る途次、合戦が始まったと聞き、すぐさま取って返し、寄手の兵(ツレ)を散々に切り落とす。貞享四年刊『能之訓蒙図彙』謡目録国付以下の諸名寄に見える。別れの場面(クセ)や奮戦の有り様の文章も悪くない。室町末期の成立か。なお義仲に従う武者(立衆)も出るであろう。

乙―現在巴。『謡曲叢書』一・日本名著全集『謡曲三百五十番集』所収。甲の縮約改作で、クセなどを省き、筋中心の短編。シテは巴、義仲をツレにし、兼平は出さず(したがって巴は最初から供をして出る)、代わりに巴と戦う恩田八郎師重(甲の詞章ではえだの八郎為重)を登場させてワキとし立衆をワキヅレとする。金剛流で明治期に所演曲とする際に甲を改作したものらしく、明治十七年山岸弥平刊金剛流外百番五番綴謡本(山岸本外組)に収められているが、明治四十五年檜書店刊の五十番綴横本(山岸本を踏襲)の外組本では高野物狂と入れ代わっており、廃された模様。芳賀矢一『四流対照謡曲二百番』上巻(明治四十一年刊)にも収められている。

【恋草】 82

甲―恋草。『未刊謡曲集』五所収。福王系の写本に伝わる。江戸を訪れた高野山の僧(ワキ)が、叶わぬ恋の思いを恨む風情の若者(シテ)に逢い、僧が高野の者で恋の果てに修行に出たと話すと、若者は秀次のお供をした人々の事を尋ね、僧が寵童不破万作・山本主水・山田三十の名を上げると、若者は柏木の中将や光源氏の事を引きながら逢わぬ恋の物語をし(クリ・サシ・クセ)、昔恋しさのあまり心乱れ(カケリまたは舞)、別れを惜しむ。シテが名を明かさず、恋の乱れの理由もはっきりしないが、現行曲「松虫」に似た男色物のようである。上杉本『乱曲』(能楽研究所蔵)に謡物「恋草」があり、本曲の初同とサシ・クセに分けて採られている。謡物を基に作られたものか。井上本『八百番名寄』所見。近作能。

乙―恋草。恋妻・浜田・思妻・京妻とも別称する。恋草として元禄十一年刊四百番外百番本(いわゆる五百番本)、『謡曲末百番』に翻刻)・『謡曲叢書』一に、恋妻として『新謡曲百番』に収められている。浜田某に仕える侍従(ツレ)が登場、北の方は帥の局といって禁中一の美人で、その美貌ゆえに色好みの政長に恋慕されたが、従わなかったため政長は浜田を讒言し流罪とし、北の方も病臥していると述べ、慰めのため訪問。北の方(シテ)は科なき夫の左遷も我が身の故と悲嘆にくれ夫の帰国をひたすら神に祈る。一方、浜田は罪も晴れ許されて帰京、荒れたる宿に妻を訪ね夫婦は再会を喜び、唐土の貞女のお話や高師直に恋慕され死んだ塩谷高貞と妻の物語をし(クリ・サシ・クセ)、無事に再会できた歓びを舞に託す。「高貞(小夜衣)」などに学んだらしく、室町末期から江戸初期にかけての成立か。江崎本『諷名寄』所見の恋草は本曲。明治の『大和田名寄』の恋草は曲の配列から見て乙を指すと思う。

なお前述のように本曲は思妻とも別称するが、同名異曲がある。鷹飼忠兼の妻が別れた夫を慕うあまり狂女となつてさまよい歩く「思妻」で、陽明文庫蔵近衛内前筆『謡名寄』(仮称。後日紹介の予定)に「思妻鷹ノコト」とある(い

わゆる四百番本・『謡曲叢書』一所収)。京妻にも、月の名所の洛西は大井川を訪ねた旅僧が、帝に見出され寵愛を受け京妻と呼ばれた女の霊に逢い、昔の物語を聞く同名異曲があるが(『未刊謡曲集』五所収)、それぞれ説明した作品のほうが一般的であり、煩雑さを避ける上から、ここでは思妻と京妻を恋草(乙)の別名とはしないでおく。

丙—こひ草。『未刊謡曲集』二十七所収。仙台本にのみ伝わり、名寄にも見えない近世の珍曲。武蔵野の草刈(ワキ)が帰路、川を船で渡ろうとしたとき、女の渡し守(シテ)から恋草という今様に名を馳せ恋草の前と呼ばれた白拍子が年老いてこの里に住んでいたが、ある夜、盗賊に財宝を奪われるのみか、殺され、死骸をこの川に沈められた事を聞く。夜、菩提を弔っていると女の霊が現われ、回向を謝す。

【恋衣】 83

甲—こひ衣。尊経閣蔵近世後期上掛り節付の写本に伝わるのみ。未刊曲(田中允氏が『未刊謡曲集』続四に翻刻予定)。冒頭、ツレ女二人が出置でワキ座に着く。ついで河内の国の住人八雲の資春(ワキ)が登場、業平が殿上で元服し春日の祭りの勅使として透き額の冠を許されたこと、美貌世に超え「女とも見えぬ男なり」と京童に評され、契りし女多く、紀の有常の娘に歌を寄せたことを述べ、歌の師と仰ぐ業平の参会の折りを待って、歌の六儀を尋ねたいと告げる。業平(シテ)登場、橋掛りで立田川の歌をはじめ資春の間に答えて歌問答をし、和歌の起原や徳を語るうち、高安の里に通わんと舞台へ入る。有常の娘の歌「風吹けば…」の場面となり、月の光りに差し向かい語り慰み、業平は舞い、伴い行く。「雲林院」や「小塩」の後ジテのような貴公子物で、詳細な衣装付や型付・囃子付もあり上演を意図したらしい。「此舞附安永九庚子正月……」との注記があり、この頃の成立か。「こひ衣」と題する意図がはっきりしない。

乙―恋衣。堂本正樹作の現代能。『僕の新作能』所収。現行曲「求塚」の趣向を借りつつ舞台をローマ帝国の時代にとり、ローマ皇帝セヴェルスの王子で清く優しい少年トアスと、皇帝の盟友だったニゲル將軍の長子で強く賢い青年ムウサとの、愛と死の物語の悲しい作品。春、旅人が城跡の花園で若草を摘んでいる若者たちに逢う。青年が美しい衣を持っているので尋ねると、名物の恋衣で、摘んだ花で染めると教え、他の者たちが帰るも青年と少年は居残り、恋衣の悲しい謂れを語る。その夜、旅人の夢に王子トアスの霊が現われ、昔を語り、ムウサ殺害を命じる父王の言葉を聞き、馬を飛ばして駆けつけたが既に亡く、近衛の兵に立ち向かうも殺されたことを語る。作者はまだ十代、若書きながら在来の能の技法を咀嚼しつつ斬新な感性が感じられる作品。結びを「夢は醒めにけり、其は総て遠つ世」と体言止めになっている。

【恋塚】 84

甲―恋塚。元禄十一年刊四百番之外百番本(いわゆる五百番本)・『謡曲叢書』一所収。ある秋、紀州の僧が鳥羽の恋塚に詣でると、里の女が現われ恋塚に案内し回向を願ひ、遠藤武者盛遠に恋慕され刃に懸かった盛継の妻の悲話を語り、妻を葬った恋塚と盛遠が太刀を洗った扇の池の謂れを語る。その夜、僧が法華経を誦読していると、盛継の妻の霊が現われ、功力により変成男子の姿となって都率天に生まれたことを歎び、夢さめる。盛遠(後の文覚)に殺されたのは源渡の妻(袈裟御前)だが、この曲では盛継の妻とし、袈裟御前の名も出さない。昔を語るクリ・サシ・クセのクリの冒頭の詞章は「隅田川」に学び、後ジテ登場の場面は法華懺法を行っている形式で、誦句が耳立つ。室町末期から江戸初期の成立か。江崎本『諷名寄』『大和田名寄』などに所見。

乙―恋塚。竹腰健造作の現代能。昭和十八年八月作。青刷り印刷の謡本がある(宝生流節付)。滝口入道と横笛に取材

した夢幻能。秋、深草の里の司(ツレ)が、花のような上臈が都より来て様を変え草庵に籠っているで名を尋ねようと告げ溪川で待つ。仏道に励む姿の尼(前ジテ)が登場、言葉をかわし、恋の思いに沈む昔を語り黄泉の人と告げて消えた。往生院に住む滝口入道(ワキ)が横笛の跡を弔うため里人(アイ)に恋塚を尋ね、読経していると横笛の霊が美しい姿を現わし、名残の舞を舞う。昭和二十一年十一月三十日、幽玄社主催の第一回能楽観賞会(於・金剛能楽堂)で作者自身のシテ、ツレ種田治郎、ワキ船越健一、アイ茂山千五郎、大鼓谷口幸治郎、小鼓高木敏郎、笛森田光春の諸氏で上演された。『謡曲三昧』(わんや書店、昭和三十三年)に本文と写真を掲載。同書に「この能は確かに長過ぎた。しかし、作詞も構成も、自分では世阿弥よりは良くできていると思っている」との感想を載せている。作者は野口兼資に師事し先代金剛巖の教えも受けた能楽愛好家で、自作の「世阿弥」(金剛巖作曲、『謡曲界』昭和十六年十月号掲載。十七年十二月謡本刊行)も『謡曲三昧』に収められている。

【勾当内侍】 85

甲―勾当内侍。『未刊謡曲集』十所収。乙丙と同工異曲で、同文の所も散見する。秋、東国方の僧が嵯峨野を訪ね、柴の庵でひたすら座禅読誦している若い女を不審に思い、言葉をかわし、この旧跡が往生院と教えられ、この嵯峨野に住んだ勾当内侍の物語(クリ・サン・クセ)を詳しく語り、回向を願う。夜、僧の夢に勾当内侍の霊が現われ、懐旧の思いに涙し、会者定離・哀別離苦の理を悟り、厭離穢土・欣求浄土を願いつつ、消えた。後ジテ登場の場面に耳遠い漢語を多用し、全体に生硬な感じが強く、甲乙丙の三曲のなかでは一番あとの成立らしい。『太平記』種の作品なので室町末期から江戸初期の作品かと思われるが、甲乙丙の三番のなかでは遅いほうかもしれない。江崎本『諷名寄』・江崎本『遠キ諷組』『吉田名寄』などに散見するのみ。

乙―嵯峨野さかのの隱かくれの別名。大和田建樹旧蔵番外謡本にのみ伝わる。新資料。大和田本は近世後期の写本。大部分が上掛り節付で下掛りも少し混じる。十番綴本で、五冊、五十番。能楽研究所現蔵。所収曲などは後述する「付、大和田建樹旧蔵番外謡本について」を参考。本曲は上掛りの節付で、内題「嵯峨野隱」の下に「勾当内侍トモ」とある。他と区別するため「嵯峨野隱」を立てたのかもしれない。甲や丙と同じく勾当内侍の物語に取材し構想も殆ど同じであるが、甲よりは整っている。末尾に「右者石河蔵人殿作ト云々」との注記がある。他に大和田本「閑翁」にも同じ注記があり、下村本(天理図書館現蔵)の「江沢藻つぐもがみ(甲)」にも巻尾に「石河蔵人作」との注記がある。石河は仮託とは思われず信じて良い記事であろう。石河についても後記を参照されたい。

内容は、諸国一見の僧が都に上り、嵯峨天龍寺に詣でると俄かに時雨が降り日も暮れたので、近くの草庵を訪ねると、庵の主(女)が請じ入れ、新田左中将義貞と勾当内侍の霊の回向を頼む。僧が読誦し自書し果てた義貞を悼むと、女はこの庵が勾当内侍の旧跡で訪れる人もないと話し、今の弔いを感謝しなおも成仏を願い、我こそ勾当内侍と明かして消える。夜、勾当内侍が本体を現わし、左中将義貞との愛別離苦、波乱に満ちた昔を語り(クリ・サシ・クセ)、後世を希い、「仏も衆生も皆もろともに、山河大地も如夢幻泡影、如露亦如電の、跡なき夢とぞなりにける」と結ぶ。甲よりは文章もこなれていて流麗。江戸前期の成立か。『享保六年観世大夫書上』所載謡名寄・『大和田名寄』などに所見。甲と同じく『太平記』巻第二十「義貞首懸獄門事付勾当内侍事」に取材。

丙―往生院の別名。『謡曲評釈』二『謡曲叢書』三所収。丸岡桂著『古今謡曲解題』で往生院の別名を勾当内侍としている。秋、上野の僧が都に上り嵯峨野を訪ね、里の女に一夜の宿を借り往生院のことを問うと、女は往生院の旧跡と勾当内侍のことを語る。その夜、僧が跡を弔っていると勾当内侍の霊が姿を現わし、邪淫の妄執を晴らしてほしいと頼み、波乱に富んだ身の上を詳しく物語り(クリ・サシ・クセ)、舞を舞い、成仏する。『太平記』種で室町末期

から江戸初期の成立らしい。甲と乙がワキ僧の出を名乗りとしシテ里の女を次第で登場するのに対し、丙はワキを次第で登場させ、シテは一セイ・サシ・下歌・上歌とし、また甲が勾当内侍の物語(クリ・サシ・クセ)を前場に置くのに対し、乙丙は後場に置き、無事も甲はカケリ、乙は舞(序ノ舞であろう)、丙も序ノ舞にしていることなどが主な違い。丙は文章が素直で、甲や乙より早い成立か。大和田本にも写伝し(この曲は下掛り節付)『謡曲評釈』の底本と思われる。『享保六年観世大夫書上』所載謡名寄・『大和田名寄』『松尾名寄』などに所見。

【好文木】 86

甲―現行曲「東北」の別名。古く軒端梅と称し『能本作者注文』『自家伝抄』なども軒端梅で見える。霞立つ春の初めに都東北院を訪れた旅僧の前に和泉式部の霊が現われ、式部遺愛の軒端の梅を教え、供養を願って消える。夜に入り僧が読経していると和泉式部の霊が本体を現じ、東北院の昔を語り、法華経の功德により今は三界の火宅を脱がれたことを告げ、梅の香匂う春の夜に舞を奏で、僧の夢も醒める。世阿弥が金春大夫氏信に与えた能本のメモと思われる『能本三十五番目録』に「ノキバノムメ」として見え、世阿弥時代の作品で、金春禅鳳の『禅鳳雑談』に「好文木」の名でクセについての諸注意などが散見する。

乙―好文木。無窮会専門図書館織田文庫所蔵の写本『新曲新待謡新連謡』に謡物「富有園」と合写。尾山神社へ参詣した石川県の教職の者が、二人の花守に会う。花守は景勝を賛美し、とりわけ諸木に先立って咲き匂う梅の花の謂れや梅の徳を語る。その夜、梅の花の精が現われ、北国の鎮めたる尾山神社の威徳を称え、楽を奏する。ワキの名乗りが「石川の県に住居する教職の者なり」とあるから明治の廃藩置県以後の成立であろう。藩祖前田利家を祭る尾山神社は明治六年の創建で、社地は前田家の別邸、十三世前田齊泰(梅叟公)がその風景をみな楽器に擬して泉水

築山を設けたという。本曲は作者未詳ながら、神社創建後間もないころに、宝生流を嗜み絶大な後援者であった前田齊泰周辺で新作されたものであろう。前田家の家紋である梅にちなんだか。嘉永五年（一八五二）が前田家の祖神である菅原道真の九百五十年忌に当たるので、齊泰が宝生友于と諮って「雷電」を改めて「来殿」を作ったと同じような背景が想像される。旧蔵者の織田小覚（一八五八・五〜一九三六・一〇）は金沢の人で宝生流を嗜んだ能楽愛好家。『寛政版記録 附、信夫顯祖事蹟』（昭和四年刊）に「寛政版宝生流謡曲本碑文」「謡卷物二百十卷」を寄せている。

【粉川寺】 87

甲―粉川寺。粉川（粉河）とも別称。元禄二年刊三百番外百番本（いわゆる四百番本）所収。『謡曲評釈』六・『謡曲叢書』一・『謡曲三百五十番集』などに翻刻。紀州粉川寺の住僧（ワキ）が、当寺に年に二度旅人を泊めない日があり今日がその一日に当たると告げ能力（アイ）にその由を伝える。都の某（シテ）が高野山に詣で粉川寺に着く。行き暮れた様子を見た寺の稚児梅夜叉（子方）は故郷近江の国の高島某と名乗って自分を訪ねるよう手紙で知らせ、対面が叶い、梅夜叉の機転により露見もせず、二人は一夜の契りを結ぶ。翌朝、都の男は忘れがたい面影を抱きつつ山を下りる。後日、男は本名を名乗ろうと登山、稚児を訪ね、酒宴となり、相舞いし、名残を惜しむ。室町期の男色物で、『能本作者注文』作者不明の項に粉河、『自家伝抄』に宮増作として粉川寺を掲出。文章も悪くはなく、稚児の優美さと優しさが主題。天文二十二年の演能記録もある。

乙―粉川寺。伊達本のみ写真伝し、名寄にも見えない近世の作品。内容は、和歌の浦一見の都の僧が粉川寺を訪ね寺に住み観音に仕える老人に会い、言葉を交わし、その夜、読経している僧の前に補陀洛世界の宗主観音が姿を現わすという短編。文中、和泉の粉川としているが紀伊の誤りであろう。

【小式部】 88

甲—小式部。『未刊謡曲集』五所収。福王系の写本に伝わる。和泉式部に仕える者(ワキ)が登場、和泉式部(シテ)が娘の小式部の内侍(子方)を伴い北野の天満宮へ参詣の由を告げ、一行は北野に到着し参拝、見事な時鳥の絵馬に感じ入り、式部は「なくかとして聞きに北野の時鳥天満つ神の誓ひなるぞや」と詠じたところ、小式部が五文字を「なけきかふ」と改めて詠吟、式部は喜び、神も納受するであろうと神拝し、天満神の来歴を語り称え、神楽を奏して帰る。元禄三年江崎本『謡名寄』以下の福王系の諸名寄に所見。乙とは類材異曲であるが、甲は式部と小式部の二人を登場させて、歌を読む場面と天満神の来歴を語るクリ・サン・クセを頂点とした現在能形式である点が大きな違いで、室町末期から江戸初期にかけての作品らしい。なお『和泉式部全集』にも翻刻されている。

乙—小式部。『未刊謡曲集』十所収。仙台本にのみ伝わる。甲とは同じ素材ながら式部や小式部を登場させず天満神をシテとする神能に仕立てた所が甲との相違点。平井の保昌の家来(ワキ)が登場し、保昌の息女小式部が物の怪のために病臥しているので、平癒祈願に北野神社へ参詣の由を告げ、社参。宮守に逢う。諸願成就を願い絵馬を捧げ、母和泉式部に先立つことを悲しんだ願主小式部の歌「いかにせん行くべきかたもおもほへず親にさきだつ道をしらねば」を捧げると、宮守は感じ、歌の徳を語り、神も納受しようと告げて消えた。その夜、小式部の孝行に感じた天満つ神が現われ、平癒を約束する。語りに「巻絹」の詞章を借り、キリには「雨月」の文句を借用するが、平板で、劇としてのおもしろみはない。名寄類の小式部は甲の方であるらしく、他に伝本もない。近世の作であろう。「嶋立沢」と「新嶋立沢」の例に学び、乙を「新小式部」とでも呼ぶか。あるいは「絵馬式部」とするか。

【琴】 89

甲―吉野琴の別名。吉野山が古名。元禄二年刊三百番之外之百番本(いわゆる四百番本)『謡曲叢書』三所収。世阿弥の『五音』の幽曲の例に元雅曲として「吉野山」を掲出する元雅作の女神の能。「琴」は『自家伝抄』や『いろは作者注文』以下の諸名寄に見える。ワキが紀貫之、シテが天女の優艶な夢幻能で、天女が琴を奏で花の吉野に遊ぶ。『源平盛衰記』卷一「五節始事」などの五節の舞の起源説話に取材し、構想も詞章も素直な遊舞能で、月澄みわたる春の夜に、天女が「花の遊楽」を展開する。室町末期まで演じられており、廃絶しているのが惜しまれる。

乙―琴。鶯宿梅とも別称する。前稿「鶯宿梅」の項で触れたように「琴」が通名。鶯宿梅(乙)。「番外謡曲」及び『未刊謡曲集』十九所収。内容は、さる方に仕える者(ワキ)が登場、主君寵愛の姫は琴を好み鶯宿梅と名付けた名誉の琴を愛用していたが、子細あってその琴を打ち砕いてしまい、姫は心沈んでいるので花見に誘い慰めようと告げ、姫(シテ)を花園に誘う。春の盛りの花を眺めているうち心晴れ、琴の起原や花陽夫人の説話など琴の威徳を物語り、舞を奏する。伝本も異本も多く、室町末期の作らしい。貞享四年刊『能之訓蒙図彙』以下近世の諸名寄所見の琴は、鴻山文庫本『謳番組』や江崎本『諷名寄』などに別名を「鶯宿梅」と注記しているので、甲の吉野琴ではなく、乙と思われる。

丙―琴。奥島愚潭作の現代能。東京都立中央図書館特別買上文庫のうち桑木巖翼旧蔵図書に謡本(印刷)がある。昭和十六年六月卅日発行。作者は本名を奥島愛治郎といい松山の人。「はしがき」によると、昭和十六年二月に嵯峨常寂光寺を訪れ、小督の局遺愛の琴を一見し、小督の局の後日談を聞いて、感興を得て脚色し、還暦神参りの記念として上梓したという。シテを琴の精とした点が異色。早春、旅の僧(ワキ)が嵯峨より高雄への山道で賤の女(シテ)の声を聞き、庵を訪ねて宿を借りる。妻木を折りくべてもてなすうち、火影にまばゆい玉琴を見、子細を尋ねる

と、女は小督の局遺愛の琴と教え、小督の局は都恋しさのあまり心乱れ、中秋の夜、琴を抱いて川に身を投げたと語り、回向を願って消えた。読誦する僧の前に琴の精が天女の姿で現われ、昔を語り、真如の月の都に帰る。生硬な表現もあるが、仙台本などのような近世の作品と違い、整っている。特に琴を擬人化した脚色は独創性があり、桑木巖翼に「小督の琴」と題する紹介がある(『宝生』昭和十八年三月号)。なお作者には昭和十六年十二月八日の真珠湾攻撃に取材した「軍神」があり、原稿用紙にペン写した草稿が鴻山文庫に所蔵されている(昭和十七年十二月八日付のはしがきあり。表紙に投稿と墨書)。

【駒形猩々】 90

甲—駒形猩々。巖猩々・番豆崎猩々・壺猩々とも別称するが駒形猩々が通名。『未刊謡曲集』一所収。番豆崎猩々(甲)としては『未刊謡曲集』十八に、半能形式の短縮型が巖猩々として『未刊謡曲集』二十一にそれぞれ所収。諸国一見の僧(ワキ。ワキツレを同行するもあり)が東国行脚の途次、浦の海上に駒の形をした多数の巖を見、浦の者(シテ)に尋ねると、尾張の国の駒形明神といって船の往来を守る神と教え、自分は海中に住む者で輪廻を離れるべく貴人の前に現われたと告げ、駒形明神の謂れを語り(クリ・サシ・クセ)、罪を助けて欲しいと頼み、酒を勧めることを約束して波に消えた。春の夜、読誦する僧の前に猩々(後ジテ。ツレ数人)が「様々の姿にて、或は壺を荷ひ、又は大瓶盃を、取持つや、花の数を尽くしつつ」現われ(渡り拍子||下り端)、舞を舞い、酒を進め、畜類も仏果を得たことを喜ぶ。室町期の作品。『言経卿記』文禄四年九月一日の条に「ふじさん・いはほしやうく借用了」と謡本貸借の事が見える。また『慶長十六年福王次郎左衛門盛勝衣裳付』に「こまがたしやうく」として「前ハ大方同。後花をかたぐるも有。さかづきをもつも有。つぼを荷も有。大勢也。後、太夫ハ同前」とあり、後場は多数の猩々が登場した

ことも確認できる。『いろは作者注文』以下の諸名寄所見の駒形猩々は甲乙丙のいずれかであるが、形式が整っている甲が最も早い成立と思われるので、恐らく甲をさすらしい。

乙―狢形猩々。貞享三年刊二百番之外之百番本(いわゆる三百番本)・『謡曲叢書』一所収。丁と同工類曲。唐土かね金山の麓のかうふう(ワキ)は、親孝行により(霊夢を蒙り揚子の市に出て酒を売り)次第に富貴の身となった。ここに童子あまた来て酒をかうので今日は名を尋ねようと告げ、市人(前ジテ)が来たので問うと潯陽の江に住む猩々と答え、祝福のしるしに泉の壺を与えようと告げて消えた。秋の夜、海中より汲めども尽きぬ泉を守る猩々(後ジテ。ツレ数人)が多数現われ、舞を舞い、千秋万歳をことほぎ、帰る。前稿で触れた和泉猩々(乙)と同工。文中に駒形(狢形)の語も、明神の謂れについての説明もなく「狢形猩々」と呼ぶのは適切ではない。

なお本曲は寄合猩々・七人猩々とも別称し、後場で「潯陽の江のほとりにて、く、菊をたたへて夜もすがら、月の前にも友待つや、また傾くる盃の、影を湛へて待ち居たり、く」という待謡があつてから「老いせぬや、く、薬の名をも菊の水、盃も浮かび出でて、友にあふぞ嬉しき、また友にあふぞ嬉しき」「御酒と聞く、く、名もすさましく秋の来て、暖め酒と菊月の、……」と続く異本もあるなど、乙および同工異曲の丁の諸本間には異同が少なくない。

丙―三河猩々の別名。三河猩々として『未刊謡曲集』十四・『三河文献集成』一所収。甲とは同材異曲で、後場はほぼ同文。春、三河の国駒形明神に海中の猩々が酒を勧め宝珠を捧げるといので当今に仕える臣下(ワキ)が下向、浦の男(シテ)と言葉を交わし、男は猩々を呼び不老不死の薬酒を勧めようといいい駒形の明神と明かして消える。夜、壺を担い(宝珠を捧げ)、盃を持ち、花の数を尽くして猩々(後ジテ)が出現し(渡り拍子Ⅱ下り端)、琴詩酒の友もかくやらんと、酒を汲み、波に舞う。甲がワキを諸国一見の僧とし、「世をば捨てても旅衣、身はいつまでか残らん」

の次第で登場するのに対し、丙は勅使として次第も「道ある御代の旅の空(旅の春トモ)、心も長閑かるらん」と祝言性を強め、前場が簡略なことが特色で、甲の脇能縮約型が丙らしい。

丁―大瓶猩猩。観世流現行曲。泰平猩猩とも書き、これも寄合猩猩・七人猩猩とも別称するが同工異曲があり、紛らわしく、大瓶猩猩を通名とするのがいい。貞享三年二百番之外之百番本(いわゆる三百番本)・『謡曲評釈』三・『謡曲叢書』二・『謡曲大観』三・『解注・謡曲全集』六・『未刊謡曲集』二十二(異本)などに所収。乙と同工類曲で、同文の所も多い。内容は乙と同じ。主な違いは、前ジテ童子の登場歌が甲「明け行けば、伴い出でて帰るさも、独り帰らぬ思ふどち」に対し、丁は「わたづみの、そことも知らぬ波間より、現はれ出づる日影かな」となっていること、後場で、甲にあった「奥より大瓶頭はれ出でて」や「(尽きせぬ泉を)守護する猩猩現れたり」などの文句が削除されていることなどである。

能には多くの猩猩物がある。俗に十六猩猩と呼ばれるほどで、様々の同工異曲が生まれ、錯綜しているが、猩猩の性格は一貫している。その猩猩の特性については、野上豊一郎『解注・謡曲全集』での指摘が正鵠を得ていると思う。いわく「猩猩といふ妖精は、海や江に棲んで、酒を愛し、一所に集まつて舞ひ遊ぶ特性を持つ。また人間の言葉を解して、自分でも人間の如く言葉を交はす。殊に、淫欲を制して無量寿を保ち、聖賢の世、豊年の代に稀に現はれて祥瑞を示す。若し猩猩が或る人家に出入すれば、その家は必ず富貴となる。かういふ伝説が伝へられてあることは、言ひ換へれば、猩猩は獣類畜類などではなく、超自然的妖精として理解されてゐたといふことになる。少くとも、能の猩猩はさういつた甚だ愛すべき祝福の妖精である。」と。

付、大和田建樹旧蔵番外謡本について

一 大和田建樹のこと

近代における能楽研究の開拓者のひとり大和田建樹（一八五七—一九一〇）には、おびただしい著作がある。大和田建樹は伊予宇和島の藩士大和田水雲の長男として安政四年四月二十九日に生まれ、幼少の頃から父及び藩の右筆岸田藤右衛門に和歌などの手習いを受け、藩校明倫館で国漢を学び、十四歳で藩侯に『孝経』を進講するほどの秀才だった。明治六年建樹と改名（後年、日記を竹木日記などと記しており「たけき」と読む。通称清太郎、のち有、清秀と名乗っている）、明治九年、二十歳の時、広島に外国語学校が設立されるや入学して英語を学び、明治十二年、二十三歳で上京、独逸語・羅匈語などを学ぶほか独学で国文学を研究し、明治十七年東京大学古典講習科講師となり、ついで東京高等師範学校教授などを歴任。のち職を辞して著作に専念する傍ら、汎く門を開いて子弟を導いた。一方、若い時分より雅楽を習い、観世清孝の門に入って観世流の能・謡を嗜み、大倉六蔵に就いて小鼓を、金春五十男に太鼓を、石井一斎に大鼓を習うなど趣味も広く（金春五十男没後は観世流の太鼓に改める）、こよなく旅を愛し、また明治女学校をはじめ諸々の女学校で教え、和歌の待宵会を主宰し、生涯に一万数千首の歌を詠んだ歌人でもある。猿丸大夫の筆名で朝日新聞紙上などに能評を発表し、「碇引」「鷲」の新作能を書いたことも知られている。

このような博学多才を反映し、その著作は、和歌・国文学に関する各種の辞典、文法・修辞学、文学史、古典注解、史伝、紀行、少年文学、唱歌（鉄道唱歌・故郷の空・青葉の笛が特に名高い）、新体詩、欧米詩歌の翻訳紹介など、広範囲にわたっている。明治四十三年九月、養生もかねて自宅近くの牛込区原町の法身寺（臨濟宗）に釣台に担がれて移り、海軍軍歌の制作にかかるが、病篤く、同年十月一日、五十四才で病没した（墓は青山墓地にある）。没後に編まれた『大和田建樹全歌集』（待宵会、明治四十四年）の付録、大和田先生著作目録によると、著作は合計九十七種、百五十一冊、三三五四五頁にも及び、そのほか明治十六年一月一日より四十三年九月二十五日まで旅行中を除くほかは一日も欠かさなかつた四十四冊もの膨大な日記と百五十四冊に及ぶ旅日記をはじめとする遺稿（未刊の物）がある。超人的かつ恐るべき著作である。（ただし、日記ほか遺稿は、戦前朝鮮に渡った遺族が戦後引揚のとき置いてこられたという。）

これらの著作は近代日本文学史上に輝く仕事であるが、なかでも従来、等閑視されていた謡曲文の注解・評釈・研究に先鞭をつけ、その重要性を広く知らしめた功績は大きい。明治二十五年一月に刊行された『謡曲通解』をはじめ四十年九月から四十一年九月にわたって刊行された『謡曲評釈』全九冊（いずれも博文館発行）は、研究の進んだ現在から見れば訂正すべき点もあるが、謡曲研究のフロンティアの世紀を示す著作であり、数次版を重ねたことはよく知られている。その『謡曲評釈』や、公刊された名寄としては当時も今も大規模で、後人が『大和田名寄』と呼んでいる『謡と能』（日用百科全書・第四十五編。博文館、明治三十三年）の著述・編集に際し、資料のひとつになったと思われるのが、ここに紹介する新出資料の大和田建樹旧蔵の番外謡本である。

二 大和田本の概要

大和田本は法政大学能楽研究所蔵の近世後期の写本で、縦22・8センチ、横16・4センチの袋綴半紙本。十番綴本の五冊本で、都合五十番。朽葉色表紙に白題簽。料紙は楮紙。各曲ごとに内題があり、時に文字遣いが異なる。全体にかかわる奥書の類はないが、六番に注記奥書がある。各冊とも第一丁表の上に「建樹蔵書」の蔵書印がある。ほぼ同一人の筆跡らしい。片面七行書き。節付は殆どが上掛りであるが、若干下掛りも混じる。大和田本の木口に「鳥子本一（く五）」と墨書されている順序に従って、所収曲の曲名と節付の有無および伝本（『未刊謡曲集』での呼称に準じる）・翻刻本の所在と注記などを列記してみる。曲名は内題に拠り、曲名下の注は括弧に示した。内題と外題が違っている場合はその旨を記す。

(一) 御菩薩(廿五ノ菩薩トモ) 上掛り節付 吉田本・版本五百番本 謡曲叢書三

黒谷 上掛り節付 下村本 未刊謡曲集二十二

春日野露 上掛り節付 観世本・吉田本・版本五百番本 謡曲叢書一

☆嵯峨野隠(勾当内侍トモ) 上掛り節付 未翻刻(国書総目録能の本の項に記載なし)

奥書「右者石河蔵人殿作ト云々」。

犬寺 上掛り節付 下村本 大和田本は犬寺(甲)で未刊謡曲集二十一

清閑寺 上掛り節付 田安本・吉田本・樋口本 謡曲評釈九

往生院 下掛り節付 下村本・田安本・仙台北1 謡曲評釈二・謡曲叢書三

桜 前 上掛り節付 下村本・仙台本1・吉田本 未刊謡曲五・二十二(大和田本は仙台本系)

卒都婆子 下掛り節付 下村本・田安本・仙台本1 未刊謡曲集十一

和 光 上掛り節付 仙台本1・吉田本 未刊謡曲集七

(二) 烏 羽 上掛り節付 仙台本1 謡曲評釈三

紅 葉(高倉院トモ) 上掛り節付 吉田本・版本五百番本 謡曲評釈八・謡曲叢書三

弁内侍 上掛り節付 謡曲評釈二・謡曲叢書三(国書総目録能の本の項に記載なし)

☆閑 翁 上掛り節付 未刊謡曲集統三(国書総目録能の本の項に記載なし)

奥書「右者石河蔵人殿作ト云々」。

現在錦木 下掛り節付 国学院本4・下村本・吉田本・樋口本 未刊謡曲集一

土偶神(將軍塚トモ) 上掛り節付 吉田本 未刊謡曲集六(將軍塚甲)

一夜天神 上掛り節付 国学院本3・4・下村本・角淵本・田安本・仙台本1・吉田本・樋口本 番外謡曲正

七 種 上掛り節付 下村本・田安本・仙台本1・吉田本・樋口本 未刊謡曲集六(大

和田本もほぼ同じ。七種乙)

鯉 上掛り節付 田安本・下村本・吉田本 未刊謡曲集七(鯉魚)

金龍山 上掛り節付 仙台本1・未刊謡曲集九

(三) 中将姫

上掛り節付

国学院本5・吉田本 未刊謡曲集六

武 俊(慈覚トモ)

上掛り節付

下村本・観世本・仙台本1 未刊謡曲集十二

十 夜(亀甲鑰トモ 慈覚トモ)

上掛り節付

観世本・吉田本・版本五百番本 謡曲叢書二(異同多し)

善導寺

上掛り節付

下村本・田安本 未刊謡曲集二十・二十二(大和田本も同じ)

鸚鵡僧

上掛り節付

吉田本 未刊謡曲集四

延喜帝

上掛り節付

下村本・仙台本1 未刊謡曲集八

橋供養(相模川トモ)

上掛り節付

下村本(相模川)・田安本(相模川)・謡曲評釈一(橋供養)

白 杵(統景トモ)

上掛り節付

下村本・田安本・仙台本1・京大本・吉田本・樋口本 未刊謡曲集一・十九・二十一

十番切

上掛り節付

下村本・田安本・京大本・吉田本 謡曲評釈八・謡曲叢書二・未刊謡曲集二十

富樫笈搜

上掛り節付

下村本・田安本・仙台本1・吉田本(笈搜) 未刊謡曲集四(笈搜乙)

(四) 二柱

上掛り節付

国学院本4・仙台本1・五百番本・大阪本・吉田本・樋口本(撰集)

未刊謡曲集一(撰集)・十三(二柱。大和田本も同じ)

龍神巖島

上掛り節付

田安本・五百番本・下村本・角淵本・吉田本・樋口本・版本 四

金毘羅

上掛り節付

百番本ほか12種(省略) 未刊謡曲集十九(巖島)
五百番本・国学院本4・大阪本・吉田本 未刊謡曲集五

☆多賀

上掛り節付

未翻刻(国書総目録能の本の項に記載なし。多賀甲)

多手利

上掛り節付

観世本・吉田本・版本五百番本 謡曲叢書二

高安小町

上掛り節付

下村本・仙台本1・京大本・吉田本・樋口本 謡曲評釈三・未刊

謡曲集十一

奥書「古津本ノ写」とあり、観世小次郎元頼の子古津宗印本の写しと知られる。

天王寺物狂

下掛り節付

仙台本1 謡曲評釈六・謡曲叢書二

九品

上掛り節付

下村本・仙台本1・吉田本(欣求浄土)・未刊謡曲集五(欣求浄土)・

二十二(九品)(大和田本は吉田本に近い)

蘭奢待

上掛り節付

観世本・田安本・仙台本1 未刊謡曲集十五

伊呂波

節付なし

五百番本・国学院本34・吉田本・版本五百番本 謡曲叢書一

(五)現世海土(題簽は現在海土)

三の舟

上掛り節付

下村本・仙台本1・吉田本・樋口本 未刊謡曲集一
国学院本4・吉田本・下村本(西川御幸)・仙台本1(西川御幸)

未刊謡曲集七

九十の賀

上掛り節付

国学院本34・観世本・吉田本 謡曲叢書一

奥書「右ハ後陽成院様御作、観世黒雪章句ト云々、以正本写也」とあり、「九十の賀」にも同様の奥書がある。
奥書「右ハ後陽成院様御作、観世黒雪章句ト云々」とある。大和田本の注記は信頼度が高く両作ともその可能性がある。後述。

立田物狂 上掛り節付 仙台本1 謡曲評釈三・謡曲叢書二
 郭橐駝^(たて) 上掛り節付 下村本・仙台本1 未刊謡曲集九
 望夫山 上掛り節付 下村本・田安本・仙台本1 未刊謡曲集十四
 鬼同丸 上掛り節付 下村本・仙台本1 未刊謡曲集九

奥書「観世弥二郎自筆ノ本ニテ写也トアリ」。「羅生門」風の作品で、この奥書に拠れば観世弥次郎長俊時代に存在したことが知られる。

赤壁 上掛り節付 下村本・田安本 謡曲評釈九・謡曲叢書二
 鴨長明 上掛り節付 謡曲評釈三・謡曲叢書一(国書総目録能の本の項に記載なし)
 世話焼鹿子(題簽は「せわ焼」) 上掛り節付 下村本・観世本(世話鹿子) 未刊謡曲集十六

右の所収曲を検討すると、大和田本は、下村本(天理図書館現蔵。『未刊謡曲集』二十四に田中允氏の詳しい解題がある)により近く、また観世本(観世宗家蔵。『未刊謡曲集』十七に田中允氏の詳細な解題がある)や仙台本1(『未刊謡曲集』十五に田中允氏の詳しい解題がある)とほぼ同系統と思われる。特に「閑翁」「嵯峨野隠」の作者と伝える石河蔵人の名は、他には下村本の「江沢藻」^{つくもがみ}に見られるのみで、伝承または祖本を同じくするものであろう。

さらに、これまでに翻刻・紹介された作品が大和田建樹校注の『謡曲評釈』のみであった「烏羽・清閑寺・橋供養」や『謡曲叢書』にも収められているが元々は『謡曲評釈』と思われる「往生院・鴨長明・十番切・赤壁・高安小町・立田物狂・天王寺物狂」といった作品群の底本がこの大和田本であることも判明する。これまで何に拠られたか不明であった上記諸曲の底本が明らかになったのである。翻刻に当っては、必ずしも原本のままとせず、通読の便をはか

り、宛字を訂したり、仮名を漢字に、漢字を仮名に改めるなどの校訂をしていることもわかった。

右のうち☆印を付した「嵯峨野隠」「閑翁」「多賀(甲)」の三番は名寄には散見するものの本文発見の作品で、この点だけでも大和田本の価値は高い。珍しい曲なので、『未刊謡曲集』続三に翻刻された「閑翁」を除き、他の二番の本文を後に示す。こうした所収曲から見て、大和田本は比較的珍しい番外曲を集成した一大コレクションであったと認められ、現在は五冊(五十番)が伝わっているが、下村本や観世本・仙台本などのように元は百番以上の揃本であったかもしれない。少なくとももう五冊(五十番)が存在したのではあるまいか。なお、「十夜」が「亀甲鑰」とも「慈覚」とも別称し、「臼杵」が「統景」ともいい、「武俊」を「慈覚」と別称したこと、「世話焼」が「世話焼鹿子」とも別称したことなど、同名異曲群を整理するときの資料が増えたことも収穫である。

さらにまた曲順を見ると、多くの珍しい曲を記載する『享保六年観世大夫書上』所載謡名寄に総て含まれるので、大和田本所収曲は享保六年以前の成立と考えられ、曲順も極めて近く、両者の関係が想察される。そして、当然の事ながら『大和田名寄』とも密接な関係にあることも了解される。大和田建樹は、この名寄を作るに当たり、当該本を資料のひとつにしていたことが、曲名の配列順が大和田本の順序とほぼ同じであることからわかる。大和田本にあつて『大和田名寄』にないのは「竜神巖島」が「巖島」の別名で記載され、「七種」が「七草」の異表記で掲出されているとみなせば、「赤壁」と「世話焼鹿子」の二番のみである。大和田本の曲順と『大和田名寄』の曲の配列を比較するため、大和田本の曲名が集中している部分を左に示してみよう。実線および破線で囲んだのが大和田本の所収曲で、(一)～(五)は冊順である。なお参考までに『享保六年観世大夫書上』所載謡名寄の一部も示す。両者の密接な関係が了解されよう。

〔大和田名寄〕

(17) 鬼童丸	(14) 天王寺物狂	(13) 白杵	(12) 十夜	(11) 一夜天神	(10) 紅葉	(9) 往生院	菅亟相	知忠	小野物狂	志賀忠度	木幡	九十賀	法華經	高祖	石菖	九景浦
鴨長明	丸品	富樫笈搜	善導寺	鯉	辨内侍	櫻前	緒環	つねしげ	堀兼	玉蟲	高野	望夫石	布智	かたき錦木	石鏡	御菩薩
上人流	蘭奢侍	二柱	鸚鵡僧	金龍山	閑翁	卒都婆子	樹神浮舟	らうとうしや	もろよし	末松山	布留	鶺鴒	布袋	まれい山	かこゑ馬	神功皇后
あはでの森	立田物狂	多賀	延喜帝	中將姫	現在錦木	和光	吉備津宮	みうへがだけ	ひかみ	伏戸	子守	逢坂庭鳥	大黒	三人孝	古今假名序	七不動
不斷櫻	郭藁駝	多手利	橋供養	武俊	土偶神	烏羽	住吉	龍王	やすさだ	貞任	須磨忠度	蘇東坡	三の舟	寶満長者	りんたう	二上

〔享保六年觀世大夫書上所載謡名寄〕

三船	紅葉	多賀	十夜	和光	七種	犬守 <small>(寺)</small>	白杵 <small>(寺)</small>	髭切	蜻蛉 <small>(こみろ)</small>	霞関	長柄	重耳	東夷	門破	乙平	室君	田鶴	七面	五節
現在蟻	鶏龍田	常陸帶	郭索駝 <small>(袋)</small>	弁内侍	龍神巖鳥	善導寺	天王寺物狂	往生院	世話焼	一夜天神	嵯峨野隠	金龍山	土偶神	伊路波	十番切	現在巴	玉津島	延喜帝	富樫笈搜
祇王	閑翁	鳥羽	二柱	武俊	赤壁	九品	黒谷	吉水	隠里	柴田	鏡池	蟹蛇	比良	母衣	閑居	融通	身延	柳津	星下
立田物狂	現在錦木	吉野静	御裳濯川	九十賀	多手利	鸚鵡僧	中將姫	卒都婆子	清閑寺	鴨長明	高安小町	鬼同丸	望夫山	蘭奢侍	御菩薩	橋供養	安達静	筆捨松	春日野露

三 後陽成天皇の新作「九十の賀」と「三の舟」

ところで、前掲のごとく大和田本によって「九十の賀」と「三の舟」の二番が後陽成天皇(元龜二)元和三。一五七一(一六一七)の作詞に觀世大夫黒雪(永祿九)元和八。一五六六(一六二六)が作曲したという、興味深く、かなり蓋然性の高い伝承も明らかになった。というのも後陽成天皇は深く学問を好まれ、しばしば『伊勢物語』『源氏物語』などの古典を侍臣に講じ、述作も少なくないし、和歌・書道・絵画にも堪能で、また慶長勅版で知られる和漢の古典数種の刊行など文化史にも輝かしい足跡を残されているが、能・謡についても嗜みが深かったことは早く江島伊兵衛著『車屋本之研究』(昭和十九年十一月、鴻山文庫)が指摘されている。たとえば、先帝正親町天皇の頃の禁中での手猿楽の演能や謡講の催しなどをあげ、謡講では「本にて」謡ったという記事が『言継卿記』に散見し、吉田兼見の日記には後陽成天皇が謡本を近衛龍山に賜った記事もある。豊臣秀吉が自分の功績などを大村由己に命じて能に作らせ金春安照に作曲させた、いわゆる豊公謡曲(五番)の一つ「高野参詣」については文祿三年三月五日聖護院道澄筆の卷子本が伝存し、題簽は後陽成天皇が宸筆を染めたものである(高野山に伝え、のち前田家に入ったという)。また『言経卿記』によると、車屋謡本(整版)を刊行した鳥養道晰が慶長六年三月五日に山科言経の手を通して新刊の謡本三十番を後陽成天皇に奉献している。こうした事例を勘案すると、古典文学に造詣があり和歌に長じ能謡に嗜みの深かった後陽成天皇に、能の新作があっても不思議はない。特に「九十の賀」は「俊成九十の賀」とも別称し、藤原俊成卿の九十の賀宴を仁寿殿において催したことに取材した作品で、『俊成卿九十賀記』などに拠って作ったものである。

これにつき思いあわされるのが、後陽成天皇在位の文祿元年(一五九二)十二月に催された前内大臣勸修寺尹豊の九十の賀で、『長寿院内府九十賀和歌』が編まれたことである。後陽成天皇の母は勸修寺晴右の女晴子で、晴右の父が

尹豊。この賀を催行したのが晴子の兄晴豊で、後陽成天皇の叔父に当たり、天皇の信任厚かったという。このような背景を考えると、いにしえの大歌人俊成の九十歳の賀に取材した作品を書き、俊成に尹豊を重ね合わせて、尹豊の賀を祝福したと思われる。『長寿院内府府九十賀和歌』には九十名の各一首が収められ、巻頭に後陽成天皇の御製と思われる「行くとしはとをとて三をみつのはま猶ひろふべきかひもあらなん」、巻軸に関白秀次の「つかへきてみてるよははひも九重に猶かぞへてよ百とせのくれ」が据えられている(『続群書類従』所収)。なお井上宗雄『中世歌壇史の研究室後期』によると「行くとし」の歌の前に正親町院の御製「かげおほきちひろの竹のよよかけてつかへしみちのためしをぞ思ふ」のあるのが原形らしい。

「三の舟」は「大堰川」「経信」「西川御幸」とも別称し、上掛りでは「三の舟」(別名大堰川・経信)が、下掛りでは「西川御幸」(別名三の舟)が通称のようである。前述のように『未刊謡曲集』七に収められている。詩・歌・管弦の三つの道にすぐれた才能を持っていることを「三舟(船)・三舟の才」というが、和歌に長じ、詩に優れ、書画をよくし、音楽に通じ、帥大納言・桂大納言と呼ばれた源経信(永長二年没、年八十二)を主人公にした作品で、白河天皇が納涼のため大堰川へ行幸し、詩歌管弦の三つの舟を浮かべて、その道の人々を分かち乗せて遊ばれた折り、遅参した経信が汀に膝まづいて「やや、どの舟にまれ寄せ候へ」と告げ、管弦の舟に乗り詩歌を献じ、見事三の舟の才を發揮した説話(『十訓抄』卷十・『古今著聞集』卷五など)に取材し、舞楽の曲名を覚えさせるための使用謡の形式の謡物(クリ・サシ・クセ)を中心に構想されている。水ぎわに膝まづき「やあやあ、どの舟でもよいからお寄せください」と言い、音楽の舟に乗りながら詩歌の二舟にも同時に乗ったのと同じ堪能ぶりを示す場面は演劇的にも魅力ある題材である。三舟の才を備え博学多芸な経信は公卿の理想像ともいってよく、この能は、朝儀の故実に精しく、公事儀式の復興に意を注いだ後陽成天皇にふさわしい作品ともいえようか。天皇の在位は、公家社会が多年の衰微を脱して安定を得た時であ

り、天正十六年四月の聚楽第行幸は朝廷の回復を示す威儀であったといわれている。想像すれば、この聚楽第行幸あたりを背景にして新作されたものかもしれない。

後嗣の後水尾天皇にも「花紅葉」(クセ謡)があり(番外謡本・花紅葉「鴻山文庫蔵」、後西院には「相模八景」(元文曲舞。丸岡桂『古今謡曲解題』)や「鶴」(文政八年筆喜多流小謡集「鶴亀」鴻山文庫蔵)があり、靈元院にも「菊之露」「秋之夕(山家之秋とも)」が残っており(靈元院作「菊之露」「秋之夕」鴻山文庫蔵)、禁裏や仙洞では江戸初期以降もこうした気運は続いていたようである。なお上記のうち「菊之露」と「山家之秋」は『列聖全集・御撰集』第一(大正五年、列聖全集刊行会)にも収められている。

四 「江沢藻」「嵯峨野隠」「閑翁」の作者は石河蔵人

前述したように、下村本の注記によって、これまで「江沢藻」の作者とされる石河蔵人に、新たに「閑翁」と「嵯峨野隠」の二番があったことを教えてくれる点も大和田本である。下村本は石河蔵人に「イシコクラウツ」と振り仮名してあるが、これは誤写または訛伝で「いしこくらんど」とすべきであろう。

なお、「江沢藻」には甲乙丙の同名異曲がある。『未刊謡曲集』二所収曲系の石河蔵人作という「江沢藻(甲)」、『新謡曲百番』所収曲系の「江沢藻(乙)」、『未刊謡曲集』二十九所収曲の「つくもがみ(丙)」である。甲は、都に上り叢堂に一夏を送る東国の僧の前に、つくも髪の女の霊が現われ、懺悔に業平と契りし昔を語り、回向によって成仏し、法謝の舞を舞うという趣向の老女物。三番目物。乙は、武蔵野を訪れた旅の僧が、業平と契った老女の霊に逢い、読経によって恋慕の妄執を晴らし成仏させるという内容の四番目物で、カケリが入る。丙は、摂津池田の宿の者が妻を離別し後妻を迎えたが、前妻の生霊に苦しめられ、安居院の小聖に頼み、祈り伏せるといふ「鉄輪」を模した、祈り

もあるらしい四番目物。甲乙が『伊勢物語』六十三段の「百年にひととせたらぬつくも髪われを恋ふらし面影に見ゆ」の歌を中心素材とした作品であるのに対し、丙は近世調の作品。このなかでは、甲が本説に忠実で、文辞脚色ともまづまずの作品であるのに対し、同じ素材ながら乙はやや創作的な部分もあり、仕上がりも落ちる。甲はまた実際に上演されたこともあったのか、あるいは上演を意図したか、間狂言の詞章が残っている。八戸市立図書館南部家旧蔵文書のうちの「江沢藻」の謡本(江戸中期写。函架番号||請求番号 南一三 六)がそれで、そのなかに間狂言の詞章もあった。初めから作者石河蔵人が創作したのか、後に別人が作ったかは分からないが、ワキとの対応で「つくもがみ」を「つくねいも」と聞き違うといった、滑稽かつ真面目な要素を込めたおもしろい内容なので、紹介しておきたい。作者が作ったものであれば、これも石河蔵人の教養などを考える資料になるかもしれない。

南部本「江沢藻」の間

狂 是は此あたりに住居仕るものにてござる。あなたなる森の木陰に、近き比より貴き御僧の御座候故、身の一
大事をも聞まほしう存て、おり／＼御見舞申す。今日も参るふとかたう御約束をいたした、先度参りて暮前に御
寺を出てそろ／＼帰つて御ざれば、道もなき草村をなにやらちらめくゆへ不審存、立留りて見候へば、愷に女の
形と見へて、ちらり／＼と見へつかくれつ、いたいつ折ふし、風冷しく気色ものすごく候故、足ばやに帰てござ
る。今宵もまたちらつかふかとしんしやくには候えども、堅ふ参らふと申た程に、定て待てござらふ、兎角行ず
ばなるまい。出られねばよいが、なにとあらふぞしらぬ、そろ／＼と参る程に、はや門前に来つてうれしや、な
ににも逢なんだ、先案内を申さう、昨日も参った者でござる、御約束故参事で候　ワキ　此方へ参られ候へ、
毎度御出祝着に候　狂　昼は世のいとなみに隙を得ず候故、夜々御見廻を申上候　ワキ　渡世のいとまを老へ

来られ候事、返すくも奇特にこそ候へ、扱尋申度事の候、近くまいられ候へ 狂 畏て候、御尋有度とは何の御用にて候ぞ ヲキ 此あたりを通られ候に、何にてもあやしきものは見申されず候や 狂 さればその事でござる、夕部罷歸の時分、月もかたぶき星あかり斗にてそろ／＼通りてござれば、道もなき草むらをうちしほれたる女の躰にて、見へつ隠れつ、ちらり／＼といたし候ゆへ、あしばやに帰りて候、頓て休みて候が、おそはれるやうにて、ことのほか気味がわるふござった ヲキ 扱は左様にて候か、愚僧此草堂に留まりて後、毎度此草村に女性来りて、喝仰の気しき見へて候、頓て見失ひ候故、夕部如何なるものぞと尋て候へば、江沢藻の女の幽霊なるが、恋路にまよひ罪ふかく、うかびがたく、永くまよひ候へば、跡をとふてくれよと申、又姿を見失ひて候 狂 なにと仰せらるゝぞ、つくねいもの幽霊が出たと候や、それは左様なる事もござらふ。兼好法師のあそばされたつれ／＼草に、山寺の法師が土大根を好みて、常に賞翫せられ候、或時盗人来り候節、鎧武者式人出て、彼盗人を追払候ゆへ、なにもものぞと御尋候へば、土大根の精と名乗かきけすやうに失たと申候、御僧もつくねいもを朝夕賞翫の節、草木国土有情非情も悉皆成仏の御説法を承り候へば、つくねいもも成仏をいたすべきとおもひて顯れ出たと存候 ヲキ いや／＼左様の儀にてはこれなし、伊勢物語に「百年に一年たらぬ九十九」と業平の読れたる九十九の女の幽霊にて候 狂 扱はつくねいもにてはこれなく九十九の幽霊と仰られ候か、それは承及て候、年寄色を好候女、情あらん男に逢見へ度と存候へども、さながら申出べき便も候はねば、子共三人を呼、まことならぬ夢物語をいたし候へば、式人の子は情なくいらへして立去り候、老人の三郎、能男出来んと夢を合せ候へば、女気色立いとよく悦候、三郎は何とぞ情あらん人に逢せ度存じ、業平を心に懸て居候処に、中将夜に出給ふを見て、頓て駒の口を取て、かやうの事候となげきければ、女の元へ御忍びまします、其後絶て音信もなければ、彼女業平の御座有所へ忍び、ものかげよりのぞき候を、中将御覧ありて「百年に一年

たらぬ九十九我や恋らし面影に見ゆ」とあそばされ候、其女の事にて候か　ワキ　中々の事、其女の事にて候

狂　是は奇特成事を仰せられ候ものかな、御僧貴くましますゆへ御弔ひの力にて永くうかび度と存ての事でござらふ、やがて御弔ひ有て然るべく候　ワキ　我等も左様に存候　狂　御用も候へば承らふずるにて候

ワキ　頼申さふずるにて候

五 石河蔵人追跡

さて、これまで不明であった石河蔵人であるが、私は石河蔵人貞代（さだよ）（宝永六年四月十八日に七十三歳で死去）か、その子供の石河蔵人貞固（さだもと）（享保十六年十月二十九日に五十四歳で死去）ではないかと考えている。

まず石河貞代だが、『寛政重修諸家譜』卷第三百二十三に石河家の系譜が載っており、清和源氏頼親の流れを汲む。祖父の貞政は豊臣秀吉に仕え、二千石を知行し慶長二年従五位下吉岐守に叙任、関ヶ原の合戦では功名を馳せ、のち讒言のため京に住み、後に徳川家康に召され、本知安堵し、大坂両度の役に秀忠に従い、寛永二年十二月に大和国添下・摂津国菟原・近江国蒲生三郡の内において領地五千二十石を賜り、承応三年四月に致仕し、明暦三年九月六日、京にて死去。年八十三。生前の慶長三年六月に貞政が開墓した妙心寺の塔頭桂春院に葬られた。法名桂春院殿前壹州太守安叟石大居士（法名は荻須純道編著『妙心寺』に拠る。桂春院には貞政以下歴代の墓碑がある由）。

貞代の父貞利について『寛政重修諸家譜』の記載を示せば次の通りである。

太兵衛　母は藤四郎某が娘。

承応三年四月二十四家を継、寄合となり、五月三日はじめて（家綱）殿有院殿に拝謁す。明暦元年四月十一日仰をうけたまはりて甲府に赴き、彼城を守衛す。万治二年五月十六日死す。年五十。法名道坦。赤坂の松泉寺に葬る。後代

々葬地とす。妻は石河土佐守勝政が女。後妻は織田刑部大輔信則が女。

さて貞代であるが、石河家では蔵人に任ぜられたのは貞代と息男の貞固の二人だけのようであり、探索中の石河蔵人はこの親子のいずれかと思われる。左に貞代の事蹟を『寛政重修諸家譜』の記載そのままに記してみよう。

蔵人 母は勝政が女。

(家網)

明暦元年五月二十三日はじめて蔵有院殿にまみえたてまつり、万治二年十二月二十五日遺跡を継、四千五百二十石余を知行し、五百石の地を弟七兵衛利久に分ちあたふ。寛文元年四月十五日より甲府城を守衛す。天和二年八月四日惣堀浚を奉行せしにより時服二領、羽織一領、黄金三枚をたまふ。三年八月四日より日光山の普請奉行をつとむ。貞享二年正月二十二日定火消となり、十二月二十八日布衣を着する事をゆるさる。元禄元年十月十二日つとめを辞す。宝永六年四月十八日死す。年七十三。法名禪龍。妻は仙石因幡守久俊が女。後妻は野間氏の女。貞代は『柳宮補任』卷之九火消役、弓組にも「貞享二丑正月廿二日同断ヨリ元禄元辰十月十二日辞 石河蔵人貞代」とある。

貞固についても『寛政重修諸家譜』の記載をそのまま引用すると、

伊織 蔵人 母は野間氏の女。

(綱吉)

元禄八年七月二十五日はじめて常憲院殿にまみえたてまつる。宝永六年七月二十三日遺跡を継、享保元年閏二月九日定火消となり、七月二十二日に布衣を着する事をゆるさる。六年四月九日つとめを辞し、十六年十月二十九日死す。年五十四。法名玄暱。妻は彦坂壹岐守重敬が女。後妻は成田宗庵直高が女。

と記されている。貞固も『柳宮補任』卷之九火消役、鉄砲組に「正徳六申閏二月九日同断ヨリ享和六丑四月九日辞 石河蔵人貞健」とあり(家譜により享和が享保の誤りであることが判明)、貞健は「さだもと」と読むのであろう。

この二人のうち可能性が高いのは貞代ではあるまいか。貞代は明暦元年（一六五五）十九歳で家綱に拝謁し、万治二年（一六五五）二十三歳で家督を継ぎ、寛文元年（一六六一）二十五歳で甲府城に赴き、甲府宰相綱重に仕え（翌年綱重に長子綱豊が誕生。のちに綱吉の養嗣子となった家宣である）、綱吉治世下の天和三年（一六八三）四十七歳で日光山普請奉行を勤め、貞享二年（一六八五）四十九歳で定火消となっている。元禄元年（一六八八）五十二歳で致仕。宝永六年（一七〇九）四月七十三歳で没しているが、その生涯はほぼ將軍綱吉の時代と重なっている。周知のように、綱吉の能への耽溺は度を越えており、元禄から宝永にかけて常備の演目だけでは飽き足らず廢絶曲の中から次々と稀曲が発掘され演じられているが（この傾向は綱吉以後も続いた）、一方では新作も各地で試みられている。能謡の新作熱が高揚した時代だった。石河蔵人作の「閑翁」「嵯峨野隠」「江沢藻」の三番もこうした現象と関連させていいのではあるまいか。注目したいのは「嵯峨野隠」に見る禅的色彩の強さである。結び近くの「萬法一に帰す」「仏も衆生も、皆諸共に、山河大地も、如夢幻泡影、如露亦如電」などの表現は、妙心寺の塔頭桂春院を創建した石河貞政を祖父に持ち、自らも法名禅龍を名乗った貞代にふさわしいように思われる。

一方、貞固も元禄八年（一六九五）十八歳で綱吉にまみえ、父の没した宝永六年（一七〇九）三十二歳で家督を継ぎ、享保元年（一七一六）三十九歳で定火消となり、同六年（一七二二）四十四歳で勤めを辞し同十六年（一七三二）五十四歳で没している。綱吉・家宣・家次及び吉宗治世下にその生涯を送った人物で、青年時代が能謡の新作高揚期に当たっている。これまた創作の筆をふるった可能性もある。しかし、前述のように『享保六年觀世大夫書上』所載謡名寄に大和田本の全所収曲が記載されているから石河蔵人作の「閑翁」「嵯峨野隠」の成立はそれ以前であり（「江沢藻」は同名寄に見えない）、貞固とすれば四十代前半までの作品となる。いずれとも決めがたいが、書上に載せるには作られたばかりの作品より、ある程度の古典性も加味されたであろうから、貞代である可能性が強いかもしれない。

六 「嵯峨野隠」と「多賀(甲)」の本文

嵯峨野隠カクレ 勾当内侍トモ

ワキ詞 是は諸国一見の僧にて候、我都にのぼり、東南の靈仏靈社残りなく拝みめぐりて候、今日は嵯峨天龍寺へ参らばやと存じ候

道行 足曳の、山時鳥一こえも、く、たがよみしとはなけれ共、人の心を墨染の、衣笠山もかきくらし。古き軒端の下すだれ、一村雨のあまやどり、く。

詞 あら笑止や、しきりに村雨のして日もはや暮に及び候、あれ成草屋の軒に立やすらはばやと存候

次第 シテ 流し雲の行末は、く、軒の雫に消ぬらむ。

サシ上 風僧牖を吹て夢更に清し、雲仏閣をおほふて晴るれども明らかならず、さばかりくらき雨の夜に、一點の孤燈かゝぐる人なく、一へんのかうゑんをたむくる事なし、あら痛しの御事やな。

下哥 現をもうつゝといかゞ定むべき

上(哥) 現には、まぼろしの世と思ふ身の、く、夢にも夢を見ずはこそ、露は消えて結ぶなり、玉のありかはそことだに、しらせで消し人ぞうき、く。

シテ詞 あらふしぎや、庵りのあたりに人おとの聞え候ぞや、是は何とて御休らひ候ぞ

ワキ 是は諸国一見の僧にて候、嵯峨天龍寺へ参候処に、俄に雨ふり候ゆへ少時やすらひ申候

シテ 是はわらはが庵りにて候、内へ御入有て雨の晴間を御待候へ

ワキ あら嬉しやさらばかう参らふずるにて候

シテ 御僧へ申候、あなたなるは新田

左中将義貞、こなたなるは勾当の内侍の名号にて候、廻向をなして給り候へ ワキ 安き間の事、廻向なし申さふ

ずるにて候 シテ(節) 其時我も立寄て、燈をかゝげ香をもち ワキ(節) かね打ならし諸共に 二人下 若我成

仏十方世界、念仏衆生撰取不捨 ワキ(節) 痛はしやな義貞は、文武二道の名将にて、忠信他にことなりしに、前生

のかいぎやうつたなきゆへによつて、はかなく自害し果給ふこと、荒痛はしや候

シテ(詞) なふ勾当の内侍と申せしは、君の叡慮も浅からず、夷心のわりなくも、思ひかけぬることの葉の、露のかご

との色ふかく、結ぶ契りの夢のうち、まくらにかゝる黒髪の、乱れし世とおもはずも、更ぬ別を^{カナシ}悲みて、此庵室に

籠りたまふ、下 今は昔の御跡を、弔ふ人もなき世なれば、御経誦誦し給ひて、いよくとぶらひ給ふならば、さこ

そ嬉しとおぼすらん、其御経の功力にひかれ、童もたすかり申さんと、泪や袖にあまるらん 地下 恥しや昔なが

らの軒ふりて 同上 名に高き、嵐の山の麓寺、く、初夜より後夜のこゑすみて、暁近き鐘の音、驚ぬ身こそ浅

ましき、身は、うき草のよるべなき、たゞよふ波の捨小舟、つもる思ひに沈みゆく、く。(ロソギ) 遥の空は久かたの、

雲霧を払いつゝ、真如を照したまへや シテ 実々更ば正眼の、くまなき月をみじか夜、法の力も大井川、水のあ

はれやうたかたの シテ下 消て帰らぬ古へ 地 なき身の果は末の露、もとの名とへば勾当の シテ 内侍は

我ぞ旅人と 地下 いふや、柴垣のかすかなる、竹のあみ戸を押明て、行かと思えて失にけり、く。(中入)

ワキ(上哥) 一夜かり寝の雨やどり、く、弔ふ法の声ふけて、真如の月の空はるゝ、あらしや夢をさますらん、く。

一セイ シテ下 更行ば、川をと高くまさるらん、いせきの波の、よるべ知らん。

上 浅ましや、ざひがうふかき此身とて 地 法のこゝろは広沢の、池のはちすのそれならで シテ 波のたまも

のうきしづむ、りんゑをたすけ給へとよ。

ワキ上 ふしぎやな月も涼しき卯の花の、垣根ににたゝずみ給ふは、此夕暮の雨やどり、やどかるかやの末の露

シテ もとのすがたを御覽ぜよ ワキ(シテと誤る) 痛しやなあいぢやくの、其執心をふりすて、
 と ワキ 払ひつくさば シテ 此宿の シテ 一念不生

地上 物かあらぬかあらし山、く、有に任て落くる、滝の白糸くりかへし、昔ををいざや語らん。

クリ 夫衆生さいどの利益にひかれて、廻る輪廻の小車の、思ひのきづなにつながれし、永き迷ひやはらすらん。

サシ上 我は頭の大奉行房が娘として 同下 金屋の内に粧をとぢ、(鶏籠) けいしやうの本にこびをとゝのふ、(鳩) 紅粉をこと

として深窓の内にやしなはれしを シテ 思はずも内侍にめされ 同 月の御遊花のえん、情の色もこまやかに、

月宮の光とこしなへにて、君王のかたはらに、さぶらひけり。

クセ下 香はみつ一輪、影は高し雲の上、夜半の気色ものすごき、寝やすだれの打とけて、独りしらぶる琴の音を、誰、

きく人も嵐吹、松のひぶきも音添て、かき乱れたるつまをとを、はづかしや内侍に、人有と物わびて、打しほれたる

はぎの露、ひろはぶやがて消ぬべき、小笹のうへのあられより、猶あだ成と我袖の、泪にやどる月影を、雲井のよそ

に白波の、音信したまづさを、手にだにとらで打過る。 (シテ)上 君きこしめされつゝ、御遊の折節に、左中将に

給はる、御盃のえんふかく、連理の枝のほとりに、(驪山) りさんの花こまやか成、(珊瑚) さんごのじゆじやうに、(陽色) やうたいの夢又、

嵯峨野の奥の柴のとや、愛別離苦の理り、今は誠の夢さめて、ごんぐ浄土の風、涼しくぞ成にける。

地下 忘れめや 舞

シテ上 わすれめや、昔の袖の恨まで 地 跡とどむべき、此よならねば

シテ下 後の世を、懸て頼みし契りこそ、法に心を懸ぬ日ぞなき

蓮葉の 地 はちすばの、結ぶや露の、玉の光りの数々も、万法一にきす、一またいつくくに シテ下 帰る白雲

の 地 山の端遠く、払ふは松かぜ シテ下 たつは夕煙

地 とりぐ様々の、ういてんべんな、目のまへに、立まふ舞の袖、かへすぐも、まよふはもうしう、悟るは即仏、ほとけも衆生も、皆諸共に、せんが大地も、(山河)によむげんぼうやう、(如夢幻泡影)如露亦如電、(如露亦如電)によるやくによでん、くくの、跡なき夢とぞ成にける。
(末尾に「右者石河蔵人殿作ト云々」の注記がある)

多 賀

次第 程はわづかの草枕、くく、目さむる心ち成らん。

ワキ(詞) 是は南都東大寺の沙門公慶と申者にて候、我多年宿願の子細あるにより、江州多賀の大社へ参らばやおもひ候

道行 上すぐに、下豊なる時を得て、くく、神も仏もあめつちも、同じ心にあふみ路や、鏡の山をかくまくも、忝なしや(まにイニ)袖の露。流れて爰に名取川、うがひの水のいさぎよく、多賀の社に着にけり、くく。

詞 急候程に、多賀の社に着て候、先是成宮守木(イモリキ)のもとに暫く休らひ、心静に参籠申さばやと存候

シテ詞 喃々あれ成御僧に申べき事の候 ワキ 此方の事にて候か何事にて候ぞ シテ 此度の参籠は何の心を以

て祈り給ふぞ ワキ 玆敷御尋にて候、外には見えじ内にこそは、神もしる覧年比の、願は語るまでも(有)まじ

シテ いやとよそれは愚なり、神託しろし召れずや、心あれば罪あり、心なければ罪なし、有無の心は我好まず、ありのまゝなる諸々の、人の心は玉の緒の、いつまでもながく尽じ物をよくく心得給ふべし ワキ しらざる事は

初めより、しらざるとせばしるべきに、御詞を返したるこそ悔しけれ シテ さすがお僧の了簡は、神慮に叶御心、

柔和に聞えたのもしや、立より給ふも宮守木の、松枝たれて葉をならべ、 上カカル ワキ 生背向たる銚杉(ホコ)にまなく村雨降

とても、頼む木陰の雨もらじ

上同 雨晴て、にほへる山の薄雲に、くく、初時鳥一声は、こゝをせにせん杉村は、伊勢やあふみにかはれ共、誓ひは同じ神心、すぐ成道は頼もしや、く。

ワキ 扱御身は聞及びたる大禰宜にて渡り候か シテ いかにも左様の者にて、明神へ御参らば先達申べく候

ワキ さあらば御案内頼申さうずるにて候 シテ 是こそ多賀の大社にて候、静に御拜み候へ ワキ ふしぎや御

身是迄御供申、道すがらあまた御迎ひの人々、忽然と見えたり心得がたくこそ候へ シテ 松杉のときはにまじる

花樗薄紫のゆかりある、山田のやしる児の宮、蛭子の社荒神の、やしるにいせのしんくらや、日向の社綸取(かんどり)の、社は

諸座其外に、活津根イッの社まで、我行かたを立さらず、上カカル 影とかたちのごとくなる、宮つこ共と御覽ぜよ

ワキ(詞) 思ひもよらぬ道しるべに、逢あふ事の有難さよ、下 和光同塵は結縁の始め、八相成道は利物の終り

下同 みしめ縄、ちりにまじはる玉垣の、光やはらぐ影そへて、我等を守り給へや

(上同) 古へも、聖代ありといひながら、くく、今大君のまつり事、民は殊更世の中の、生としいける物までも、御

慈イックシみ覚しめす、命は、此多賀の大社、寿命神は我なりと、玉の扉トヒラを押開き、御簾に入せ給ひけり、くく。(中入)

ワキ上哥 夜もすがら、此榊葉の下陰に、くく、有つる告を待むとて、袂ひらきて臥にけり、くく。

後シテ 上 神はをのれが心、忌もいまぬも、をのが心すぐなる時は則神

地 御殿頻りに御燈をかゝげ、撰社別宮まのあたり シテ 日月の光、星の影 地 和光同塵をのづから、光もあ

けの、玉垣かゝやきて、新たに御神躰顕れたり。

シテ 我鴻毛未分の最初より、此日の本に地をしめて、万物成就の悦をみせしめ、諸願空しくする事なし。

クリ地 抑日の少宮(わかみや)と申奉るも則当社の御事なり シテ 夫神秘様々広き 同 心よりも玉の緒ながら

サシ 然れば伊弉諾の尊功すでに至り 同 徳又おほひなり、是にをいて天に登り報命カヘリコトマツす、仍て日の少宮に留りす

み給ふ、日の少宮は近江の国良のかた日の出そむる御ゆへなり 下シテ 日の少宮は伊弉諾の尊 同 伊弉諾の尊は日の少宮皆是一躰分身たり

クセ 人心、なべてやはらく国風俗、神敬ふに成をませる、人又神の徳により、かれ又運をそふとかや、其うへ仏とは、ただありの人仏にて、仏をみればただありの、人の外には仏なし、され共仏神は、衆生済度の方に、丈六の尊像を、聖武皇帝勸願に、昔の都東大寺に、大伽藍を立給ふ、中比道場の、絶なん事を悲しみて、俊乗坊重源、白河帝の勅をうけ、時の將軍頼朝の、助力の外に、秋津洲や、ひとの国迄勸進に、既に出べき時節に至り、命のはかりがたければ、先此多賀の大社、日の少宮に参籠し、願成就の其内の、寿命の事を祈りしに、神も感応ましくて、蓮の一字たび給ふ シテ上 扱こそ俊乗上人は、同 廿を延る余命得て、歡喜の涙うるほふ四方の、国々すゝめいれ、終に本懐遂げにけり、其俊乗が再来の、東大寺の公慶、命は多賀に任すべし、此度伽藍の建立は、猶是よりも東照、日光山の明らけき、今、此御代の明はたる、願ひはみてん時いたる。

シテ下 去程にまれ人を、く、まうけの神楽取々の、八声もそひて明やすき、夜も早空をしらにぎて、き禰が鼓の声すむや シテ上 謹上 地 再拜 (ここで神楽を舞うのであろう)

シテ下 久堅の、天運つよくあら金の 地 土も動ぬ シテ下 神の御前に、

同 く、松杉榎の、とぶさたつるは シテ 則神のぬさ 地 御廉を風の、巻あぐる音は シテ下 颯々の鈴

の声 地 引や横雲は シテ それぞ神馬 同 神風帽おろし、吹たちく、ねぐらの鳥の、羽を翻る小忌衣、謹上再拜、く再拜と、天下大平、国土ゆたかに、神はあがらせ給ひけり。

〔翻刻に当っては、原本の表記を尊重しつつ構成を考慮し適宜改行し、また振漢字や句読点を施した〕